

国立国会図書館



憲政資料室の新規公開資料から

100万冊をあなたの街へ—図書館向けデジタル化資料送信サービスの現況

企画展示 あの人の直筆

世界図書館紀行 イタリア エミリア・ロマーニャ州の図書館

2014.10

No. 643

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

10 October

CONTENTS

- 02 クマグスからの手紙 白井光太郎宛南方熊楠書簡
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 憲政資料室の新規公開資料から
- 13 100万冊をあなたの街へ
一図書館向けデジタル化資料送信サービスの現況
- 19 企画展示 あの人の直筆
- 26 世界図書館紀行 イタリア エミリア・ロマーニャ州の図書館

12 館内スコープ
「憲政資料室の新規公開資料から」まで

18 本屋にない本
○『高島屋美術部百年史 1909-2010』

34 お知らせ
○登録利用者情報の失効と更新
○国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」
○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の蔵書から

クマガスからの手紙

白井光太郎宛南方熊楠書簡

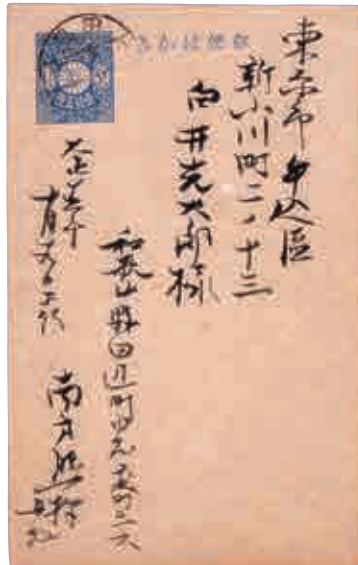
豊田 さおり



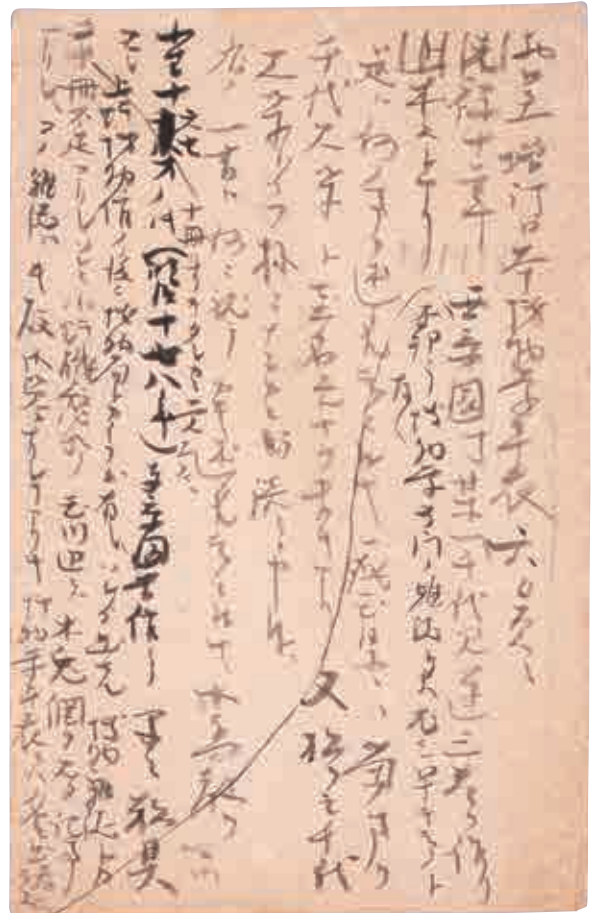
南方熊楠肖像



白井光太郎肖像



葉書 (大正 15 年 10 月 19 日付)



葉書 (昭和 2 年 10 月 24 日付)

[白井光太郎宛南方熊楠書簡ほか] <請求記号 W391-N40(31)> ※古典籍資料室所蔵 ※マイクロフィルムでの閲覧となります。 <請求記号 YD-古-6863>

1 電子展示会「描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌」>コレクション紹介>白井文庫

http://www.ndl.go.jp/nature/colle/colle_2.html

この電子展示会では、白井文庫の資料が多く紹介されている。

2 明治政府は、一町村一社を原則に神社を合祀する政策を採ったが、各地の神社と鎮守の森の消滅は史跡や自然環境の破壊という弊害を生んだ。明治 42 年頃から熊楠は合祀反対の論陣を張り、白井は熊楠の運動に積極的に協力した。

明治から昭和に生きた博物学者南方熊楠^{みなかたくまぐす} (1867-1941 以下、熊楠)。若くしてアメリカ・イギリスに渡り、ほぼ独学で動植物学を研究、帰国後は粘菌の採集・研究のかたわら民俗学の論考を多数執筆しました。国立国会図書館は、この熊楠の書簡 14 通を所蔵しています。いずれも植物学者白井光太郎^{みつたろう} (1863-1932) 宛てで、大正 15 (1926) 年 10 月から昭和 2 (1927) 年 11 月にかけて書かれたものです。

白井光太郎は東京帝国大学教授などを歴任し、専門の植物病理学のほか、江戸時代以前の本草学を研究しました。当館に納められた旧蔵書約 6,000 冊は、代表的な本草関係コレクション「白井文庫」¹として知られています。

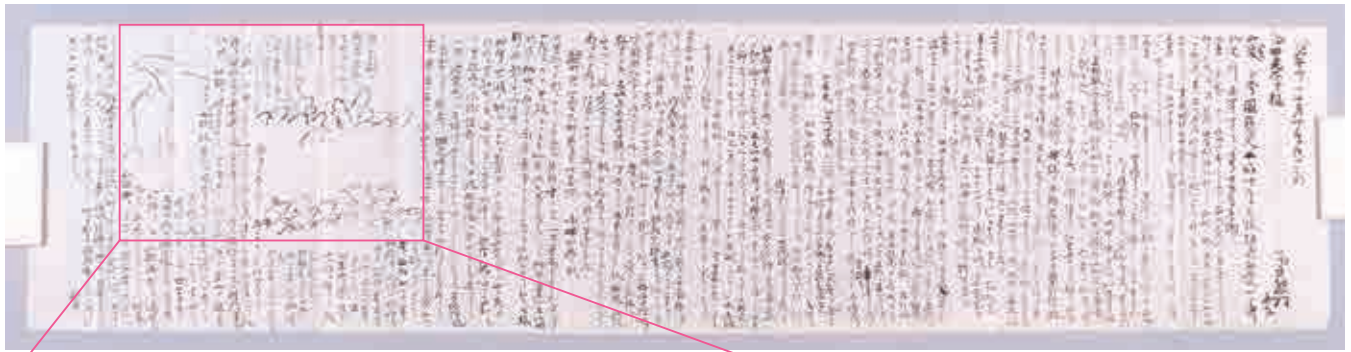
熊楠と白井はどのような間柄だったのでしょうか。2 人を結びつけたのは、民俗学者柳田國男 (1875-1962) でした。明治 44 (1911)

年、柳田が熊楠に白井を紹介、柳田の書簡に同封するかたちで 2 人の文通が始まります。神社合祀反対運動²や本草学への関心など、共通点の多かった 2 人は盛んに書簡をやりとりし、その交流は昭和 7 (1932) 年に白井が急逝するまで続きます。

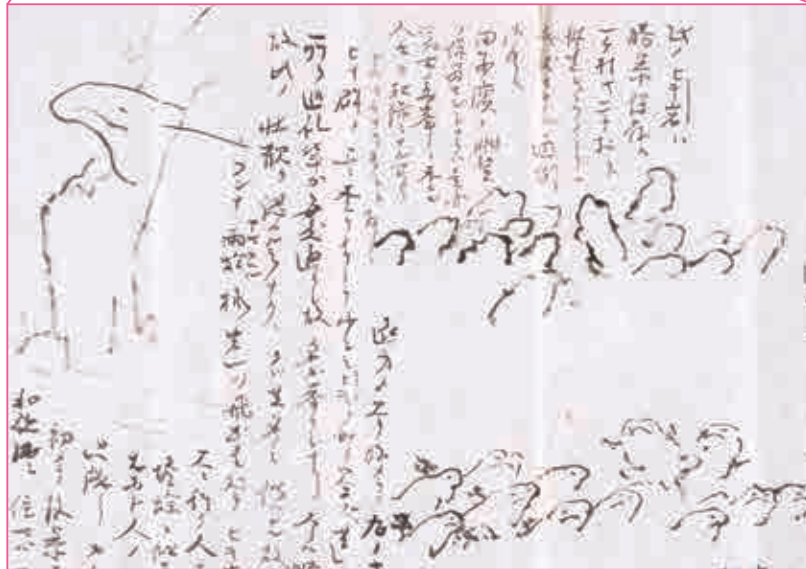
ここでは、2 人の交友の一端がうかがえる書簡を 2 通紹介しましょう。

昭和 2 年 10 月 24 日付の葉書では、冒頭で白井の著書『日本博物学年表』(増訂版)に出てくる『千代見草』という書物について質問しています。「御高教ヲマツ。早々敬具」と一旦書き終えた後に、『博物雑誌』という雑誌を持っているかと追加の質問。最後は余白がなくなり、3 行目に戻って続きを書いています。このような追記の多さと縦横無尽な書き方は、熊楠の書簡の特徴とされます。

興味深いのは、熊楠が 16、7 歳の時、東京



封書（昭和2年11月13日付）



矢野宗幹・長谷川仁旧蔵資料（長谷川幹氏寄贈）
 熊楠の書簡14通は、白井に師事した昆虫学者矢野宗幹（1884-1970）が持っていたものです。矢野の蔵書は弟子の長谷川仁（1918-2006）に受け継がれましたが、長谷川没後の2010年7月、長谷川自身が収集した資料も含め、ご遺族により寄贈されました。この中には、白井のほか、伊藤圭介・篤太郎（「伊藤文庫」旧蔵者）に関する資料も含まれており、当館の本草関係コレクションを補完するものとして貴重といえます。
 矢野宗幹・長谷川仁旧蔵資料は、東京本館古典籍資料室で所蔵しています。
 <請求記号 W391-N40(1)～(217)>

図書館で『博物雑誌』を見たと言っていることです。東京図書館は当館の前身の一つで、その蔵書のほとんどは当館に引き継がれており、『博物雑誌』も所蔵しています³。熊楠は、いわゆる「履歴書」として知られる書簡⁴の中で、当時の様子を「授業などを心にとめず、ひたすら上野図書館（東京図書館の通称）に通ひ、思ふまゝに和漢洋の書を読みたり。随て欠席多くて学校の成績宜しからず」⁵と振り返っています。ほかにも熊楠が手に取った本が当館のどこかにあるかもしれません。

昭和2年11月13日付の封書は、白井の著書『日本園芸史』についての質問から始まり、後半に何とも味のあるカエルの絵が出てきます。これは、熊楠が住んでいた和歌山県田辺町（現 田辺市）にある景勝地、「ひき岩群」と「ひき岩」を描いたものです。現在「ひき岩群」は国民休養地、「ひき岩」は県指定天

然記念物として保護されていますが、当時は岩を砕いて小川の修理に使おうとする動きもあったらしく、「到底久シカラヌ内ニ此ヒキ岩ハ全滅ノ筈ニ候」と強い口調で非難しています。

熊楠にとって白井は、植物学・本草学研究での協力に加え、自然保護においても考え方を同じくする人物でした。在野で研究を続けた熊楠は官学者を嫌っていたとされますが、白井とは立場の違いを超えて理解し合える関係だったのではないのでしょうか。

なお、紹介した2通のうち、葉書は現在東京本館で開催中の企画展示「あの人の直筆」（会期：2014年10月18日～11月18日）⁶に出品しています。熱意あふれる筆跡をぜひ間近でご覧ください。

（とよだ さおり 利用者サービス部人文課）

- 3 マイクロフィッシュ請求記号 YA5-81
- 4 大正14年1月31日付、矢吹義夫宛書簡。矢吹が簡単な履歴を求めたところ、熊楠は巻紙で約8メートルにも及ぶ長大な書簡を送った。
- 5 『南方熊楠全集』第8巻、乾元社、1951、p.4
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2941182/12>（国立国会図書館と図書館送信参加館内の限定公開）
- 6 本誌 pp.19-25 参照。

参考文献
 ○郷間秀夫「南方熊楠と博物学者白井光太郎」『熊楠研究』(7), 2005.3, pp.328-306.
 ○郷間秀夫「南方熊楠と博物学者白井光太郎(承前)」『熊楠研究』(8), 2006.3, pp.386-364.
 ○松居竜五、田村義也編『南方熊楠大事典』勉誠出版、2012
 ○雲藤等著『南方熊楠と近代日本』早稲田大学出版部、2013

憲政資料室の新規公開資料から

国立国会図書館は、幕末・維新时期から現代にいたる政治家、官僚、軍人らの所有していた個人文書（憲政資料）を所蔵しています。このたび東京本館憲政資料室で新規に公開した資料をご紹介します。

阿南惟幾関係文書

（あなみ これちか 1887～1945） 陸軍大臣
59点 平成26年4月公開 【ご遺族からの寄贈】

阿南惟幾は、第二次世界大戦の終戦を迎えた鈴木貫太郎内閣において陸軍大臣を務め、昭和20（1945）年8月15日早朝に「一死以テ大罪ヲ謝シ奉ル」との遺書を遺し割腹自決した軍人です。

このたび、昭和13（1938）年から自決の前日までの日記（写真1）を中心とした資料の寄贈を受けました。日記以外には、阿南が昭和9（1934）年から昭和11（1936）年まで校長を務めた陸軍幼年学校の関係資料や、戦後に記された関係者らの追想資料が含まれています。また、かつて日記の公刊が企画された際に作成されたワープロ版の原稿もあわせて公開しています。昭和45（1970）年

に刊行された『阿南惟幾伝』の中で、著者の沖修二が「毎日が殆ど早朝の弓に始まり、夜の反省に終るこの日記を、いずれの日か多くの人に読んでもらいたいものである」と述べていた阿南の日記が利用できる環境が整いました。

阿南 惟幾

明治20(1887)年東京生まれ。大正7(1918)年陸軍大学校卒、参謀本部、サハレン州派遣軍参謀、フランス出張を経て、昭和8(1933)年近衛歩兵第2連隊長。侍従武官、東京陸軍幼年学校長、陸軍省人事局長などを経て昭和14(1939)年陸軍次官。以後第11軍司令官、第2方面軍司令官などを経て昭和20(1945)年4月陸軍大臣、同年8月15日自決。



<肖像写真の出典>

沖修二 著『阿南惟幾伝』講談社 1970 <請求記号 GK34-1>



写真1 「阿南惟幾日記」 <阿南惟幾関係文書9～12、14、16、17>



安東貞美関係文書

(あんどう ていび 1853～1932) 陸軍大将
80点 平成26年6月公開 【ご遺族からの寄贈】

安東貞美は兵学寮出身、第10師団長、第12師団長、台湾総督を歴任した陸軍大将です。資料には、日清戦争時（当時、鉄道線区司令官）や日露戦争前後（当時、第19旅団長、第10師団長）の日記が含まれています。また明治26～27（1893～94）年にベルリン等で視察を行った際の日記も軍人の海外視察記録として興味深い資料です。さらに、上原勇作、大迫尚道、田中義一、寺内正毅などの軍人や、政治家からの来簡も含まれます。

この文書の寄贈にあたり、一般社団法人霞会館の皆様のご助力を得ました。

奥野誠亮関係文書

(おくの せいすけ 1913～) 官僚、衆議院議員
1,583点 平成26年7月公開 【ご本人からの寄贈】

奥野誠亮は、奈良県出身の政治家です。東京帝国大学卒業後、内務省に入省。地方局、自治庁長官等を経て、自治省事務次官に就任。昭和38（1963）年に衆議院議員となり、文部大臣、法務大臣、国土庁長官等を歴任しました。資料は、政策研究大学院大学での保管・整理を経て、このたび奥野氏ご本人から寄贈を受けました。

衆議院議員時代以降の資料が中心となっており、地方自治、選挙制度、文教・教科書問題、史跡・文化財、公安、外交、厚生・労働、同和問題、税制・財政金融関係の書類など多彩な内容となっています。

大串兎代夫関係文書

(おおぐし とよお 1903～1967) 研究者（法学、国家学）
1,966点 平成25年9月公開 【ご遺族からの寄贈】

大串兎代夫は、法学、国家学の研究者で、『国家学研究』（朝倉書店、1942）などの著書があります。寄贈資料は、大正9（1920）年から昭和22（1947）年にいたる日記、戦前から戦後にわたる論文の草稿・覚書が主なものです。日記には東京帝大法学部時代、ドイツ留学時代の記述が豊富です。大串は太平洋戦争中、大日本帝国憲法第31条に関連して非常大権を発動することについて研究していたので¹、非常大権関係の論稿が充実しています。資料は官田光史氏（当時、日本学術振興会特別研究員PD）による整理を経て、ご遺族から寄贈されました。

¹ 官田光史「非常事態と帝国憲法—大串兎代夫の非常大権発動論」『史学雑誌』120(2) 2011.2. pp.203～224

片柳真吉関係文書

(かたやなぎ しんきち 1905～1988) 官僚、参議院議員
396点 平成26年2月公開 【ご遺族からの寄贈】

片柳真吉は、農務官僚を経て後に参議院議員になっています。寄贈を受けた資料は、終戦直後の食糧管理局長官当時の食糧問題に関する記録である「食糧対策審議会摘録」（1946）や昭和25（1950）年頃の米価に関する書類、昭和45（1970）年頃の国際農友会関係の書類などです。その他、片柳による著述の雑誌記事スクラップを含みます。

賀屋興宣関係文書

(かや おきのり 1889～1977) 官僚、大蔵大臣、衆議院議員
99点 平成25年12月公開 【購入】

賀屋興宣は東京帝国大学卒業後、大蔵省に入省、のち第1次近衛内閣や東条内閣の大蔵大臣を務め、戦後A級戦犯として終身刑判決を受け、仮釈放・減刑後、衆議院議員となり、法務大臣等を務めました。この文書は平成25年に購入したもので、賀屋宛書簡約90通からなります。蔵相期の来簡が中心で、災害復旧予算の追加を求める昭和13(1938)年の末次信正(内務大臣)書簡、大蔵省が推進していた国民貯蓄奨励運動推進のための巡回講演に関する書簡、昭和13(1938)年の日満華経済懇談会の関係書簡など、大蔵省の動向をうかがわせる資料が充実しています。

蔵相としての経験や戦前の財政政策等について、賀屋に直接聞き取りを行った「賀屋興宣政治談話録音」²(当館の事業として昭和50(1975)年11～12月に収録)の音声や速記録も憲政資料室において公開しています(平成18年1月公開)。あわせてご利用ください。

² 政治談話録音については、堀内寛雄「政治談話録音の50年」『国立国会図書館月報』613号 2012.4を参照。

島内登志衛関係文書・島内志剛関係文書

(しまうち としえ 1870～1922) 新聞記者、著述家
(しまうち ゆきたか 1893～1957) 軍人
登志衛：1,497点 志剛：1,523点 平成26年2月公開
【ご遺族からの寄贈】

島内登志衛・志剛父子の家に遺された文書の寄贈を受け、それぞれ独立した資料群として公開しました。

父親である登志衛は高知に生まれ、東京朝日新聞社で政治部記者として活躍した後、出版社社長などを務めた人物です。その傍ら本名や雅号の島内柏堂の名で編著書を世に出しており、特に明治45(1912)年に刊行された『谷干城遺稿』は続日本史籍協会叢書で復刻されるなど、史料集として高く評価されています。本資料群にはその『谷干城遺稿』編纂に関する資料(写真2)および当時の谷子爵家とのやり取りなどが含まれています。

一方、息子の志剛は、陸軍軍人としての道を歩み、士官学校卒業後に通った東京外国語学校露語科で習得したロシア語の知識を活かして満洲の前線などで活躍しました。満洲に出征した昭和10(1935)年8月から書き継がれた日記が資料の中心で、特に昭和17(1942)年までの期間は詳細に記述されています。

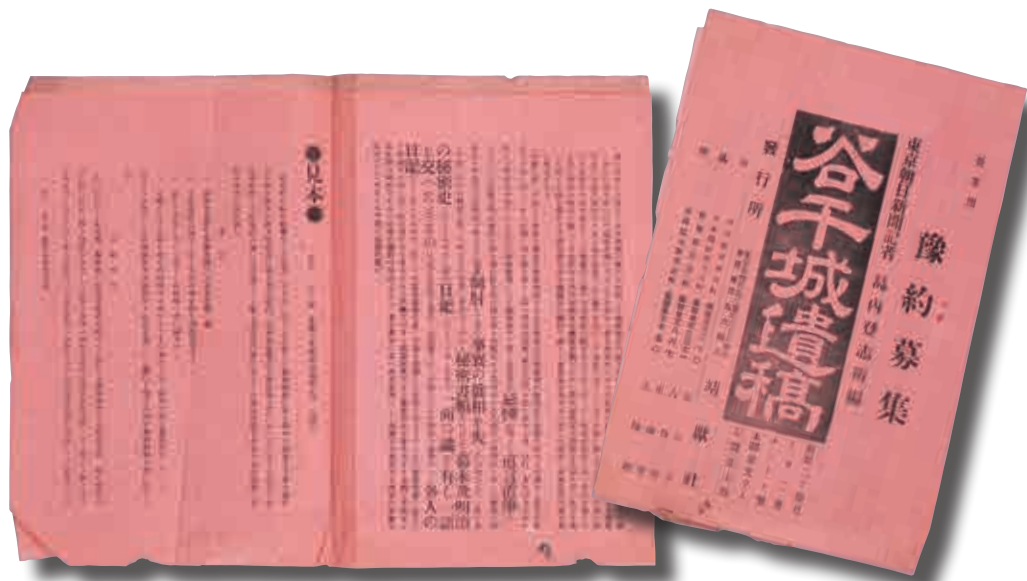


写真2 『谷干城遺稿』チラシ <島内登志衛関係文書631>

長崎省吾関係文書

(ながさき しょうご 1852～1937) 外交官、官僚
1,559点 平成25年9月公開【購入】

長崎省吾は明治期の外交官、宮内官僚です。ロンドン公使館に勤めていた際に、ヨーロッパ各国の王室の制度や典礼、社交の類を調査研究し、帰国後には、その知見を活かして宮内省にて宮中の業務に従事しています。

資料は古書店から購入したもので、外交に関連する書類は、明治15（1882）年のハワイ王国への出張記録が主なものです。宮中関係では、海外における儀式や制度を調べた際の記録類が多く、ヨーロッパの王室の記録類をまとめたものや、先例や故実を調べたものが多く含まれています。

また、長崎は、『英都交際一斑』（吉川半七、1887）を執筆するなど海外における社交一般にも通じ、明治26～27（1893～94）年にかけての東伏見宮依仁親王の欧米巡回や明治40（1907）年の伏見宮貞愛親王の訪欧に随行し

て、その時の記録も遺しています。

写真3は、東伏見宮依仁親王の欧米巡回の際の日誌（全19冊）の第1冊目です。明治26（1893）年8月26日にシカゴに着いた時に、同地開催の万国博覧会に参加していた日本人に出迎えられた様子を記しています。

長崎 省吾

嘉永5（1852）年、鹿児島生まれ、造士館・昌平黌で学び、外務省に奉職。米国ミシガン大学で学び、英国に渡る。ロンドン公使館勤務。明治13（1880）年帰国後、宮内書記官。明治15（1882）年にハワイ出張、その後、式部官・宮内大臣秘書を経て、明治30（1897）年調度局長。明治41（1908）年調度頭・宮中顧問官となる。昭和12（1937）年死去。



<肖像写真の出典>

原田道寛 編『大正名家録』二六社編纂局 1915
国立国会図書館デジタル化資料でご覧いただけます。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954637/369>

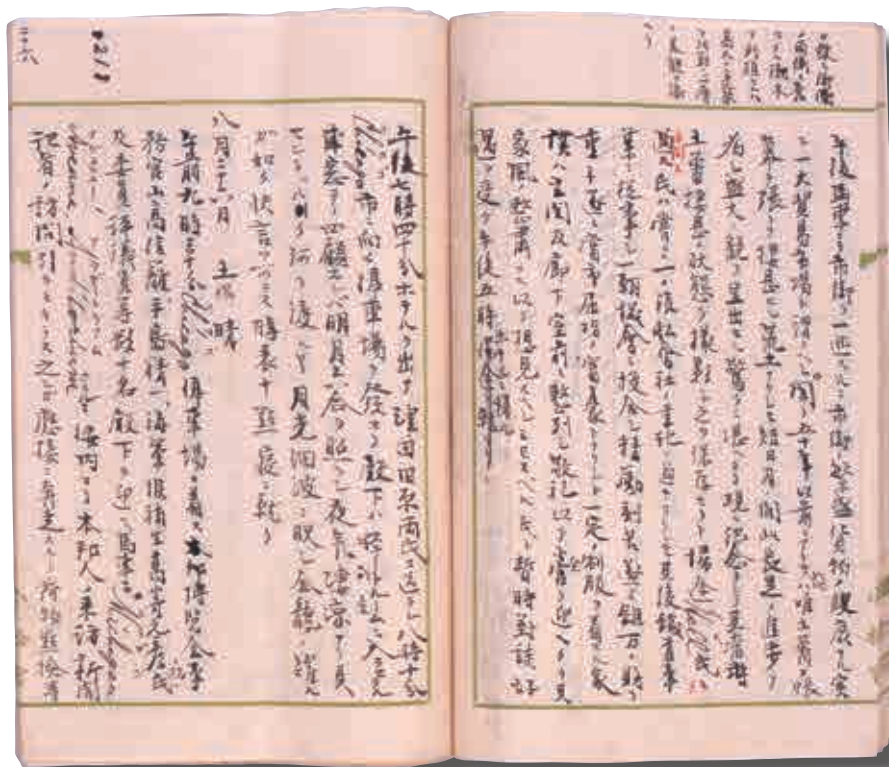


写真3 「依仁親王欧米巡回日誌」明治26年8月26日 <長崎省吾関係文書35-1>

鍋山貞親関係文書

(なべやま さだちか 1901～1979) 社会運動家
第1次受入分 855点 平成25年4月公開
第2次受入分 70点 平成25年11月公開 【ご遺族から寄贈】

鍋山貞親は、工員を経て友愛会に入り、京都赤旗事件で入獄、大正11（1922）年に日本共産党に入党し社会運動家として活動しますが、昭和8（1933）年6月に佐野学と連名で行った獄中からの「転向」声明は、世間の注目を集めました。

この文書にはこの転向声明書の写し、昭和5（1930）年の予審尋問調書など、戦前の資料もわずかに含まれていますが、大半は戦後の講演、執筆活動に関連した原稿類や執筆記事のスクラップとなっています。

また第2次受入分（資料番号1001～1015）には荒畑寒村、風間丈吉、佐野学、西尾末広など、著名な運動家と戦後に交わした書簡が含まれています。

長谷川清関係文書

(はせがわ きよし 1883～1970) 海軍大将
141点 平成25年9月公開 【ご遺族から寄贈】

長谷川清は海軍次官、軍事参議官を歴任し、昭和15（1940）年11月から昭和19（1944）年12月まで台湾総督を務めました。総督退任後、同じく海軍出身の鈴木貫太郎は「永らくの御重責を遂げられての無事の帰京は恐悦である」といういたわりの手紙を長谷川に書き送っています（昭和20（1945）年1月22日付、資料番号9-2）。

また大正期に米国大使館付武官を務めた経歴から、当時の日米交流を物語る資料も残されています。日米協会での会合を写した写真（写真4）もそのひとつです。その他、岡田啓介、斎藤実、松平恒雄をはじめ、約30名からの来簡や台湾総督時代、海軍時代のアルバムなども含まれています。



写真4

Japan Society Annual Dinner in honor of his excellency Masanao Hanihara, Hotel Astor <長谷川清関係文書67> 大正13年3月10日（駐米）特命全権大使埴原正直を迎えての日本協会の晩餐会。埴原は、米国通の外交官として大正12（1923）年2月に米国特命全権大使として着任したが、大正13（1924）年に排日移民法成立の責を負う形で帰朝させられたともいわれる。

坊秀男関係文書

(ぼう ひでお 1904～1990) 衆議院議員
280点 平成25年10月公開【ご遺族から寄贈】

衆議院議員で自由民主党に所属していた坊秀男は、第1次・第2次佐藤内閣、福田内閣でそれぞれ厚生大臣、大蔵大臣を務めています。

文書は若いころから晩年までの日記（大正7（1918）～平成元（1989）年）と手帳が主なものです。日記帳を紐解くとおおむね自身の活動や感想を書いている日が多く、大臣在任期は閣議での本人の発言や話題となったことを記していることもあります。

写真5は厚生大臣を務めていた昭和42（1967）年7月18日と19日の日記で、当時争点となっていた健康保険特例法改正案をめぐる状況がうかがえます。その他に後援会の通信『東京だより』も初号からそろっています。

細田吉蔵関係文書

(ほそだ きちぞう 1912～2007) 官僚、衆議院議員
35点 平成26年5月公開【ご遺族から寄贈】

細田吉蔵は、島根県出身の政治家です。東京帝国大学卒業後、鉄道省に入省し、運輸省観光局長、運輸大臣官房長等を経て、昭和35（1960）年に衆議院議員となり、行政管理庁長官、防衛庁長官、自由民主党総務会長、運輸大臣等を歴任しました。

昭和43（1968）年から平成17（2005）年までの日記が断続的に31点ありますが、党の要職にあった時期や閣僚在任期を含め、当日の行動と面会者などが淡々と記されています。



写真5 日記 昭和42年7月18日、19日 <坊秀男関係文書45>

安田辰馬関係文書

(やすだ たつま 1906～2002) 官僚
1,353点 平成26年2月公開 【ご遺族からの寄贈】

戦前・戦後と労働行政に、なかでも職業紹介事業や雇用対策にかかわっていた安田辰馬の旧蔵文書は、執務のための参考資料となる書類や職業斡旋、職業教育に関する小冊子の類を含みます。職業安定・婦人少年問題など労働行政の資料が多く、なかでも戦前期では近畿地方関係、戦中期では戦時労働政策関係のものが目立ちます。

山本達雄書簡巻 (憲政資料室収集文書 273)

(やまもと たつお 1856～1947) 貴族院議員、実業家
1巻 (17通) 平成26年4月公開 【購入】

山本達雄は、大分出身の政治家・実業家です。日本郵船会社を経て日本銀行へ入行、同総裁を経てのちに政界へ転出しました。

当資料は平成25年に当館が購入したのですが、17通の書簡は、すべて小林万吉（大阪朝日新聞記者）宛のものです。書簡の発信時期は、明治41（1908）年から大正8（1919）年までで、桂園内閣期から原敬内閣の時代に

あたります。山本はこの間に、日本勧業銀行総裁、大蔵大臣、農商務大臣等を務めました。

写真6は、2個師団増設問題をめぐり、山本が蔵相を務めた第2次西園寺内閣が倒れ、第3次桂内閣が成立した直後の緊迫した政治情勢を伝えています。国民多数が西園寺に同情していること、今度の議会は解散となるだろうということが述べられていますが、はたして、政党・国民を主役とする広範な憲政擁護運動の前に、桂内閣は大正2（1913）年2月に総辞職します（大正政変）。ほかに、第2次大隈内閣および寺内内閣期の政情を伝える書簡なども含まれています。

和田耕作関係文書

(わだ こうさく 1907～2006) 衆議院議員
2,050点 平成25年10月公開 【ご本人からの寄贈】

和田耕作は高知県出身の衆議院議員です。戦前は満鉄調査部や企画院、東亜研究所などの調査機関に勤め、敗戦後はソ連に抑留されます。昭和24（1949）年12月に帰国後は日本フェビアン研究所事務局長などを務め、民主社会党の結党に参画しました。昭和58（1983）年の政界



写真6 山本達雄書簡 小林万吉宛（大正元年）12月31日 <憲政資料室収集文書273-9>

引退後は民社党顧問を務める傍ら、著作活動に専念しました。

文書は平成18年6月に和田氏自身からご寄贈を受けました。戦後の衆議院議員時代の資料が多く、自身が関わった日本フェビアン研究所、社会主義政策研究会、民主社会主義研究会議、民社党（民主社会党）などの関連資料も含まれます。

資料の大半は刊行物であり、本人の著作記事や関連記事が掲載されているものが多数です。また、手書きで「予定表」と記されたノートは、昭和41（1966）年から平成元（1989）年にかけて毎年数冊ずつそろっており、主に民社党での議員活動を知る上での貴重な資料となります。



また、マイクロフィルム撮影により「加藤鏖五郎関係文書」を収集しました。

加藤鏖五郎関係文書（MF:愛知県公文書館寄託）

（かとうりょうごろう 1883～1970）衆議院議員
マイクロフィルム22巻（226点）平成26年5月公開

加藤鏖五郎は愛知県出身の衆議院議員です。第5次吉田内閣の国务大臣、法務大臣を歴任し、昭和33（1958）年末から昭和35（1960）年初めにかけては衆議院議長を務めました。

憲政資料室では、平成26年3月に愛知県公文書館寄託の加藤鏖五郎関係資料（マイクロフィルム）から複製マイクロフィルムを作製し、同年5月に公開しました。内容としては吉田茂、芦田均などの書簡、昭和4（1929）年から昭和44（1969）年までの日記・手帳（欠あり）などを含みます。

今回のマイクロフィルム作製にあたり、資料所蔵者の加藤家および愛知県公文書館のご協力を得ました。

（利用者サービス部政治史料課）

憲政資料室のご案内（東京本館 本館4階）

幕末・維新时期から現代にいたる政治家・軍人・官僚などが所蔵していた文書類を集めた「憲政資料」、第二次世界大戦終了後の連合国による日本占領に関する米国の公文書を中心に集めた「日本占領関係資料」、主に北米・南米への日本人移民に関する資料を集めた「日系移民関係資料」を扱っています。

憲政資料室の利用方法、今回紹介した以外の所蔵資料等についてはリサーチ・ナビ「憲政資料室の所蔵資料」をご覧ください。

URL: <http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/>



「憲政資料室の新規公開資料から」まで

本号の「憲政資料室の新規公開資料から」という記事（4～11ページ）はお読みいただけましたか？この1年、明治を生きた軍人や著述家から存命中の政治家まで、幅広い人物に関連する資料を公開できました。めでたしめでたし。

でも、そういった資料がどうして国立国会図書館にあるの、と気になった方はいませんか？そんなあなたに、公開までの裏側をちょっとだけご披露しましょう。

私たちのところに資料がやってくるきっかけは、研究者の方の仲介か、資料所蔵者の方ご自身による憲政資料室への連絡のどちらかであることが大半です。資料があると聞けば、やはり見てみたくなるもの。まずは内容について確認して、資料収集方針に合致するものであれば、資料を引き取ります。紙袋一つ分から段ボール数十箱まで、と分量はさまざまで、箱が多いとさながら引越しのようです。

さて、運び込んだらすぐ整理、といきたいところですが、その前に大事な一作業。万が一資料の中に紙を食べる虫などが隠れていて、書庫に連れ込んでしまったら取り返しがつきません。酸素のない環境にしばらく資料をおいて、悪い虫がいても生き残れないようにします。

それが済めばよいよ目録の作成です。1点ずつ資料を見て、内容や作成年代などのデータを記録していく、という地味で時間のかかる作



業ですが、これなしには資料を提供することができません。丁寧に見ていくと意外な発見もあったりして、楽しい瞬間です。また、この時に、錆を生じて資料をいためるステープラーなどを外してこよりで留め直したり、資料を中性紙の封筒に入れるなど、資料を長く保つための処置もしています。1点ごとのデータを取り終えたら、資料群全体の構成に配慮しつつ利用しやすい形にデータを並べ直して、目録が完成します。

完成した目録の公開と共に、資料もついに日の目を見ます。真新しい封筒に包まれた新公開の資料が利用者に手渡されると、まるで親のような心境…さすがにこれは言い過ぎですね。

それはさておき、憲政資料室では、常に新たな資料を探しています。近現代の政治家や官僚などの手元にあった資料にお心当たりのある方は、ご一報いただけると幸いです。

（政治史料課 親になりたい蛙）

100万冊をあなたの街へ

— 図書館向けデジタル化資料送信サービスの現況

国立国会図書館は、平成26年1月21日から図書館向けデジタル化資料送信サービス（図書館送信）を開始しました。当館がデジタル化した資料は、従来はその多くが当館の施設内での利用に限られていましたが、図書館送信の開始により、全国の図書館等でも利用することが可能になりました。

図書館送信のサービス開始から現在までの利用状況と、さらなる普及・拡大に向けた取り組みについてご紹介します。



1. サービスの概要

(1) サービスの特長

図書館送信を利用する図書館では、当館が提供するデジタル化資料を使って、閲覧・複写サービスを行うことができます。当館の書庫に収められている100万冊以上の資料について、各図書館が仮想的な蔵書として利用できると言い換えてもよいでしょう。

デジタル化資料の利用には、郵送にかかる時間や貸出期間の制約がありませんので、利用者の求めに応じて、すぐにいつでも提供することができます。また、原本の貸出が制限されている資料（和雑誌、発行年代の古い和図書等）も利用可能です。

(2) 利用できる図書館

図書館送信の利用を希望する図書館は、当館に対して承認申請を行っていただく必要があります。

承認申請ができるのは、著作権法第31条第1項の適用を受ける「図書館等」です。著作権法第31条第1項に基づく複写サービスを実施している図書館は、この対象となります。公共図書館、大学・高等専門学校図書館等のほか、文化庁長官の指定を受けた機関も含まれます。

(3) 利用できる資料

当館のデジタル化資料のうち、著作権処理が終了した約48万点については、インターネットで公開していますので、どなたでも本



表1 デジタル化資料提供点数（平成26年8月末現在）

※ 概数のため、合計が合わない場合があります。

資料種別	インターネット公開	図書館送信	国立国会図書館内限定	合計	
図書	昭和43年までに受け入れた図書	35万点	50万点	5万点	90万点
古典籍	貴重書・準貴重書、江戸期以前の和漢書等	7万点	2万点	—	9万点
雑誌	平成12年までに発行された雑誌	0.8万点	67万点	56万点	123.5万点
博士論文	平成3～12年度に送付を受けた論文	1.5万点	12万点	1万点	14万点
その他	官報、憲政資料、日本占領関係資料等	4万点	—	6万点	10万点
合計		48万点	131万点	68万点	246.5万点

文を見ることができます。

図書館送信では、インターネットで公開されていないデジタル化資料の中で、絶版等の理由で入手困難な約131万点（表1）が利用できます。入手困難とは、市場に流通在庫がなく、商業的に電子配信されていない等、一般的に図書館が購入することが困難なものを指します。

(4) 利用方法

① 閲覧用端末と管理用端末

図書館送信を利用する図書館では、利用者が使う閲覧用端末と、図書館の職員が使う管理用端末（兼複写用端末）の2種類の端末を用意していただきます。ただし、複写サービスを行わない図書館では、閲覧用端末と管理用端末を1台で兼ねることもできます。また、複写サービスを行う図書館では、プリンタが必要です。

② 閲覧

デジタル化資料を利用できるのは、各図書館の登録利用者です。デジタル化資料の閲覧を希望する利用者に対しては、自館の登録利用者であることを確認した上で、閲覧用端末を案内します。

閲覧するためには「国立国会図書館デジタルコレクション」¹にログインする必要があ

りますが、ログインの操作は図書館の職員が行います。利用者は、閲覧用端末で資料を検索し、本文を画像で閲覧します。

閲覧できる場所は図書館の施設内に限られます。施設外からの接続や、端末の館外への持ち出しはできません。また、利用者が持ち込んだ機器（パソコン、USBメモリ等）を端末に接続することや、画面キャプチャ、写真撮影等を行うことも禁止しています。

図1 閲覧の流れ



③ 複写

利用者が複写（画像の印刷）を希望する場合は、資料を特定する情報（タイトル、当館請求記号、永続的識別子²等）と複写箇所（ページ番号、コマ番号等）を教えてもらい、図書館の職員が管理用端末とプリンタを用いて印刷を行います。利用者自身が印刷の操作を行うことは認められません。

複写できる範囲は、著作権法第31条第3項の要件に基づきます。著作権法第31条第1項と同様、利用者の求めに応じて、調査研究の目的で、著作物の一部分の複製物を一人につき一部提供することができます。

図2 複写の流れ



1 <http://dl.ndl.go.jp/>
 2 デジタル化資料1点ごとに付与されている固有の番号。
 3 図書館向けデジタル化資料送信サービス参加館一覧 http://dl.ndl.go.jp/ja/soshin_librarylist.html

2. 利用状況

(1) 参加館数

平成26年8月末現在、図書館送信の利用について承認されている図書館（参加館）の数は表2のとおりです。参加館の一覧は、「国立国会図書館デジタルコレクション」のサイトに掲載しています³。

(2) 利用（閲覧・複写）点数

サービスを開始した平成26年1月21日から8月31日まで（223日間）に閲覧、複写された資料の点数の推移は図3のとおりです。1月から8月までの利用を合計すると、閲覧が46,147点、複写が20,717点でした。

1日あたり207点の閲覧、93点の複写が行われている計算になりますが、図書館によって利用の多寡に差が見られます。最も利用が多い図書館では毎日十数点の利用がある一方、数日に1回程度の利用にとどまっている図書館もあります。

【館種】

利用点数を図書館の種類別に集計すると、公共図書館の利用が多く、特に都道府県立図書館が多数を占めています。全体的に都市部での利用が多い傾向が見られます。大学図書館では、資料の複写を求める利用者の割合が高いようです（図4）。

【主題（図書）】

図書館送信で利用できる資料のうち、図書の多くには日本十進分類法（NDC）による分類記号が付与されていますので、図書の主題別に利用傾向を調べることができます。

図5を見ると、文学（NDC9類）、歴史・地理（NDC2類）に関する資料が多く利用されていることが分かります。文学については詩歌や小説、歴史・地理については日本史や

表2 参加館数（平成26年8月末現在）

申請区分	都道府県立図書館	政令指定都市立図書館	市区町村立図書館	大学図書館	その他	合計
閲覧のみ	7	2	11	4	0	24
閲覧・複写	45	30	74	121	9	279
合計	52	32	85	125	9	303

※ 同一の地方公共団体や大学から、複数の図書館が参加している場合があります。それぞれの図書館の単位で1館と数えています。

図3 利用点数（平成26年1月21日～8月31日）

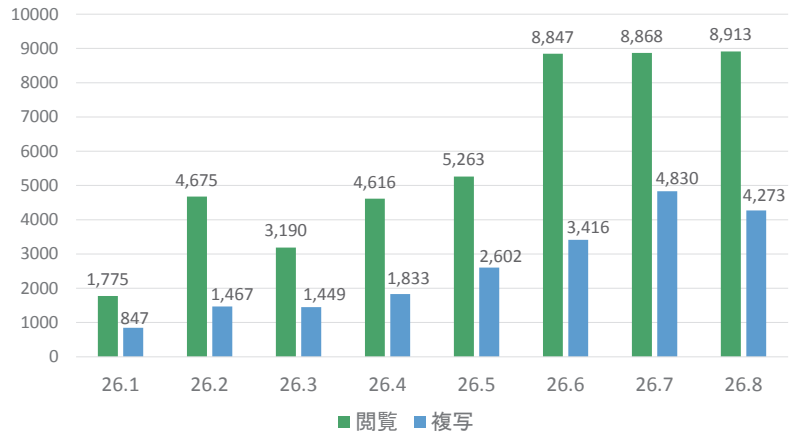


図4 利用点数（館種別）

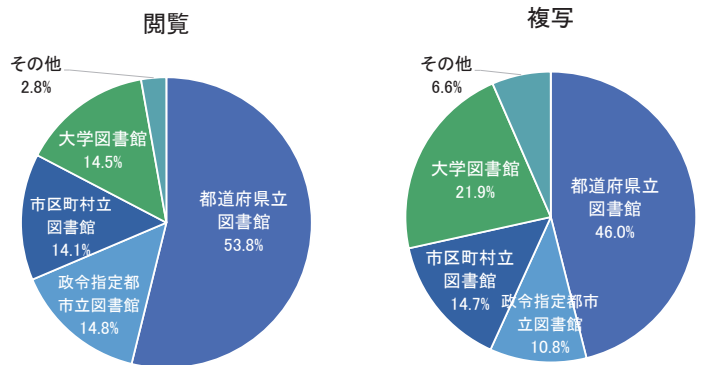
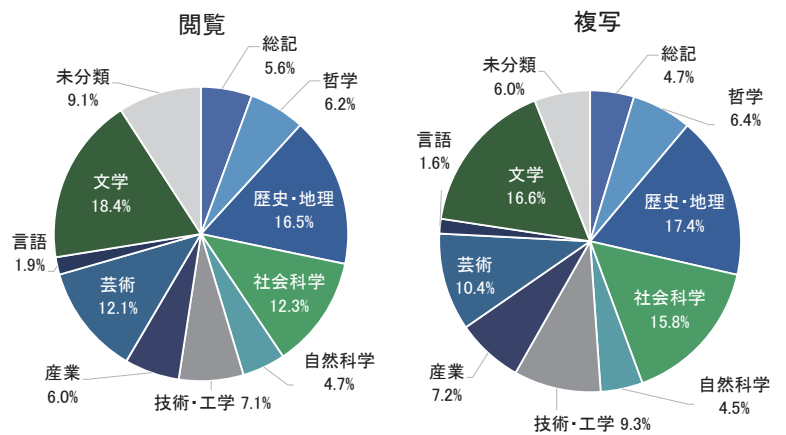


図5 図書の利用点数（主題別）



伝記に関する資料が特に利用されています。

(3) 参加館での利用動向

参加館での図書館送信の利用動向を見ると、大きく二つのパターンに分けられます。

一つは、利用者が、デジタル化資料を利用することを目的として、図書館送信参加館に来館する場合です。見たい資料を事前に特定した上で、図書館に来る利用者も多いようです⁴。

もう一つは、レファレンスサービスを通じて、図書館の職員がデジタル化資料の閲覧を案内する場合です。利用者から質問を受けた際に、自館の所蔵資料に加えて当館のデジタル化資料も活用することにより、幅広い資料を利用者に提供することができます。

例① こんな資料が利用できます。

『東京オリンピック』1号～30号（オリンピック東京大会組織委員会，1960.3-1964.12）〈請求記号 Z780.6-To1〉

昭和39（1964）年に開催された東京オリンピックの組織委員会会報です。昭和35（1960）年3月から、オリンピック終了後の昭和39（1964）年12月まで刊行されました。大会会期や競技種目の決定に至る過程、競技施設や高速道路の建設に関する状況等、大会が近づくにつれて準備が進んでいく様子を読み取ることができます。

例② レファレンスサービスに活用されています。

Q 「君が代」の外国語訳を見たい。

A 「君が代」に関する資料を「国立国会図書館デジタルコレクション」で検索すると、『国歌君が代の研究』（小田切信夫著，平凡社，1965）〈請求記号 767.5-O225k〉が見付かりました。図書館送信の参加館では、本文を閲覧することができます。この資料の中に、「君が代」の漢訳、英訳、独訳、仏訳、伊訳等の歌詞が掲載されています。

⁴ デジタル化資料の書誌データは、参加館に行かなくても、インターネットを通じて自宅等で調べることができます。

3. 普及・拡大に向けて

1月のサービス開始から8ヶ月で、300館を超える図書館で図書館送信を利用できるようになりました。参加館になるための申請方法については、「参加館になるには…」(右ページ下枠)をご覧ください。

ただし、参加館になるだけでは、このサービスを十分に活用できるとは限りません。利用することによるメリットを理解いただき、各図書館において、よりよい活用方法を生み出していただくことを期待しています。それを促進するため、当館では、研修会の実施、参加館での活用事例の紹介等を積極的に行う予定です。

また、参加館へのアンケート実施や、参加館に訪問して担当者との意見交換の場を持つなど意見収集を行い、今後のサービス改善・向上につなげていくことを考えています。「国立国会図書館月報」でも、図書館送信の最新事情や活用方法について、お知らせしていきます。

4. おわりに

図書館送信の参加館では、当館のデジタル化資料を各図書館の「蔵書」として利用することができます。利用者が使える資料の数が格段に増え、レファレンスサービスの幅も広がります。

図書館送信が普及すると、全国の図書館が多様な資料を提供する情報拠点となり、図書館の存在感が向上することが期待されます。まだ参加館になっていない図書館では、ぜひ申請をご検討ください。

(利用者サービス部サービス企画課、
関西館文献提供課)

100万冊を利用するには…

どこの図書館で見られるの？

全国300館以上の図書館で利用できます。参加館一覧をホームページに掲載していますので、ご参照ください。



国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>)
 > 図書館向けデジタル化資料送信サービスについて
 > 図書館向けデジタル化資料送信サービス参加館一覧
 (http://dl.ndl.go.jp/ja/soshin_librarylist.html)

利用にあたっては、その図書館の利用者として登録する必要があります。登録できる要件は、図書館により異なります。

コピー（プリントアウト）はできるの？

コピーサービスを行っている図書館と、行っていない図書館があります。参加館一覧のページに、【閲覧・複写】と記載されている図書館では、著作権法で認められた範囲でコピーサービスを行っています。なお、

用紙サイズ、カラー印刷の可否、料金などは、図書館によって異なりますので、詳しくは各館にお問い合わせください。

どんな資料を利用できるの？

昭和43年までに当館が受け入れた図書、平成12年までに発行された雑誌などが対象です(p.14表1参照)。どのような資料が利用できるかは、インターネットを通じて自宅等で調べることができます。国立国会図書館デジタルコレクションで、「図書館送信資料」のチェックボックスを利用して検索すると、効率よく探せます。本のタイトルだけでなく、図書の目次、雑誌に掲載された論文のタイトルなどで検索することもできます。

インターネットから利用はできないの？

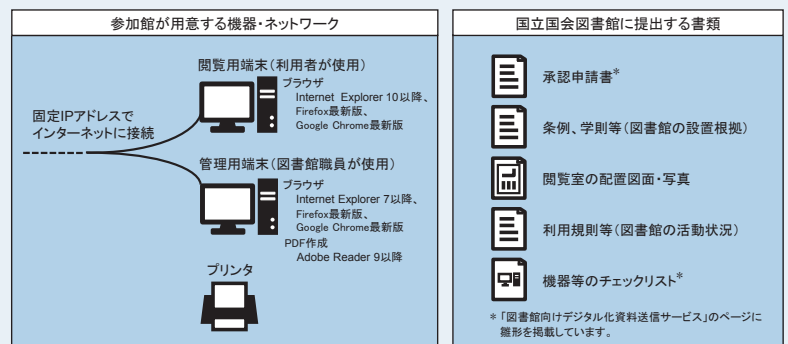
著作権の保護期間が満了した資料など、約48万点はインターネットで公開されています。国立国会図書館デジタルコレクションや近代デジタルライブラリーから検索してご覧いただけます。

近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/>)

参加館になるには…

申請をしていただく必要があります。申請にあたって必要な機器・ネットワーク、書類等は右図のとおりです。詳細はホームページをご覧ください。

また、申請手続きなどについて、問い合わせの多い質問を「よくあるご質問」として掲載していますので、あわせてご参照ください。



国立国会図書館 ホームページ トップ > 図書館員の方へ
 > 図書館向けデジタル化資料送信サービス
 (http://www.ndl.go.jp/jp/library/service_digi/)
 > デジタル化資料送信サービスについてよくあるご質問
 (http://www.ndl.go.jp/jp/library/service_digi/faq.html)

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

高島屋美術部百年史

The 100-year history of Takashimaya Fine Arts Division : 1909-2010

高島屋刊 2013.4 383p 31cm <請求記号 K3-L28>

「百貨店の画廊」に行ったことはあるだろうか。美術館には足を運ぶ人であっても、「自分には縁のない場所」と思っている人が多いかもしれない。百貨店画廊は実際のところ、美術のマーケットにおいて大きな役割を果たしている。本書は、百貨店画廊を長年引っ張ってきた高島屋美術部の100年が詰まった一冊である。

高島屋は、天保2年(1831)年に木綿商として開業。友禅の下絵製作などに日本画家を用いたことで画家との結びつきを強くし、作品販売を伴う新作展を開催するようになったことから、明治44(1911)年に美術部を創設した。

第1部「日本美術の100年と高島屋」では、日本画・洋画・彫刻・工芸・茶の湯について、それぞれの分野全体の100年間の動きと絡めながら、これまでの高島屋の展覧会を紹介している。百貨店画廊ときくと、「有名作家の高い作品ばかり扱っているのでは?」と思うかもしれないが、若手作家に発表の場を与えて育ててきたという役割も大きい。特に、高島屋が企画した数々のグループ展は、そのジャンルの新しい流れを作ることも多く、美術評論家などによって高く評価されている。

第3部「百貨店と美術市場」では、第1部にはなかった「売る」という視点で美術が語られる。美術部の仕事内容、作家との付き合い方、デパートそのものの客層の変化……。バブル時代には、人気作家の作

品を買うために開店前から行列ができたが、近年はアートフェアやオークションなど、買い方も多様になってきた。美術品はそれ単体で利益を上げるだけではなく、集客に貢献する目的もあったが、その効果も薄れてき

ている。今、百貨店画廊の存在意義はどこにあるのか。この問いかけに対する美術部顧問や美術誌編集長などの対談は読みごたえがある。対談の最後が「品格」という言葉で締められている点は、まさに「百貨店」というイメージで印象深かった。

美術品には、制作者がいて、販売者がいて、購入者がいる。本書は、これまで美術館でしか美術品を見たことがない人にぜひ読んでほしい。美術は思ったよりも我々の身近にあることがわかるだろう。

筆者はもともと美術館に行くのが好きだったが、百貨店画廊を知ってからは、頻繁に通うようになった。たいてい無料で入れる。何の気なしに覗いた展覧会が面白かったといった出会いもある。また、美術館にない楽しみとして、作家と話すことができる。話しかけてみると、喜んで作品について語ってくれるはずである。そうすると、作品の見方も変わってくる。そして、気に入った作品に出会えたならば、家に飾ることもできる。美術館で見ただけでは、「家に美術品を飾る」という考えにはなかなかないが、好きな作品が家にあるというだけで、家の景色が大きく変わり、生活が豊かになった気分になる。ぜひ、この楽しみを味わってほしい。

(利用者サービス部政治史料課 かわい まきひこ 河合 将彦)



国立国会図書館平成26年度企画展示

あの人の直筆

少生とあはれんがり困るは



伊三ニストル権厚かぬ



善の道に立ち入りくらん人は、

〇〇〇自ら四三三三とありて



武佩布



星の論は表を共す



今年少味し

りくしりてはつら

ふいふいふいふい

南方は



<右上から下に>

芥川龍之介の筆跡*・肖像・原稿、野口英世の筆跡・肖像、曲亭馬琴の肖像・筆跡*、南方熊楠の筆跡・肖像、西郷隆盛の筆跡・肖像、徳川齊昭の筆跡・肖像、与謝野晶子の筆跡・肖像、夏目漱石の葉書・肖像・筆跡、坂本龍馬の筆跡・肖像、福澤諭吉の筆跡・肖像 (*は前期のみ、**は後期のみ)の展示箇所)

平成26年

10月18日(土)～
11月18日(火)

(日・祝休館)

10:00～19:00
(土曜は18:00まで)

国立国会図書館
東京本館 新館展示室

入場無料

展示替え、展示箇所の変更を行います。
前期：10月18日(土)～11月1日(土)
後期：11月4日(火)～11月18日(火)

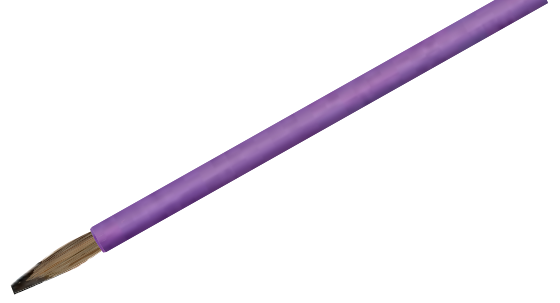
・フロアレクチャー

10月28日(火)、11月11日(火) 近代の政治家を中心に
講師：季武嘉也(創価大学文学部教授 国立国会図書館客員調査員)

・ギャラリートーク

10月25日(土)、11月8日(土) 当館担当職員が見所をお話しします。
※いずれも14:00から40分程度。申込不要。展示会場受付にお集まりください。

あの人直筆



国立国会図書館では、国内外の出版物以外にも、様々な資料を所蔵しています。

10月18日から11月18日まで、日本の近世から戦後にかけて活躍した有名人約150人の直筆を集めた展示会を、東京本館で開催します。

お札になったあの人、教科書に載っているあの人一体どんな字を書いたのでしょうか。書簡や原稿などからは、あの人息遣いが聞こえてくるかもしれません。ここでは、出展資料の中から主なものをご紹介します。 (展示委員会企画展示小委員会)

(*前期のみ展示、**後期のみ展示) 【】内は請求記号



細川忠興夫人書簡

(『細川忠興同夫人等書状』のうち)
〔安土桃山時代〕写 【WA25-35】*

侍女小侍従に宛てたもの。流麗な筆跡の美しい仮名散らし書きで、文面からは周囲の者への細やかな心配りが読み取れます。

※後期はガラシャの別の書簡を展示します。

ほそかわ 細川 ガラシャ

1563-1600

明智光秀の娘。名は、たま、洗礼名ガラシャ。細川忠興に嫁したが、慶長5(1600)年関ヶ原の戦いで忠興が東軍に与したため、石田三成の人質となることを拒み、家臣の手によって自らの命を絶った。



本草綱目草稿

〔江戸中期〕【WB9-10】*

蘭山が『本草綱目』の講義に用いた覚え書きです。余白部分はおびたしい書き込みで埋め尽くされており、袋綴じの折目を切って裏面まで使用しています。安永末（1780）年頃までに作成され、没するまでの約30年間、補充・訂正を重ねました。講義を聞いた弟子による記録はよくありますが、講述者自身の講義用覚え書きは珍しいものです。

※後期は別の箇所を展示します。

おのらんざん
小野 蘭山
1729-1810

本草学者。主著の『本草綱目啓蒙』48巻（享和3（1803）～文化2（1805）年）は、明の李時珍の著書『本草綱目』の講義録で、日本の本草学の集大成とされる。シーボルトは蘭山を「日本のリンネ」と評する。



山東京伝画入書簡

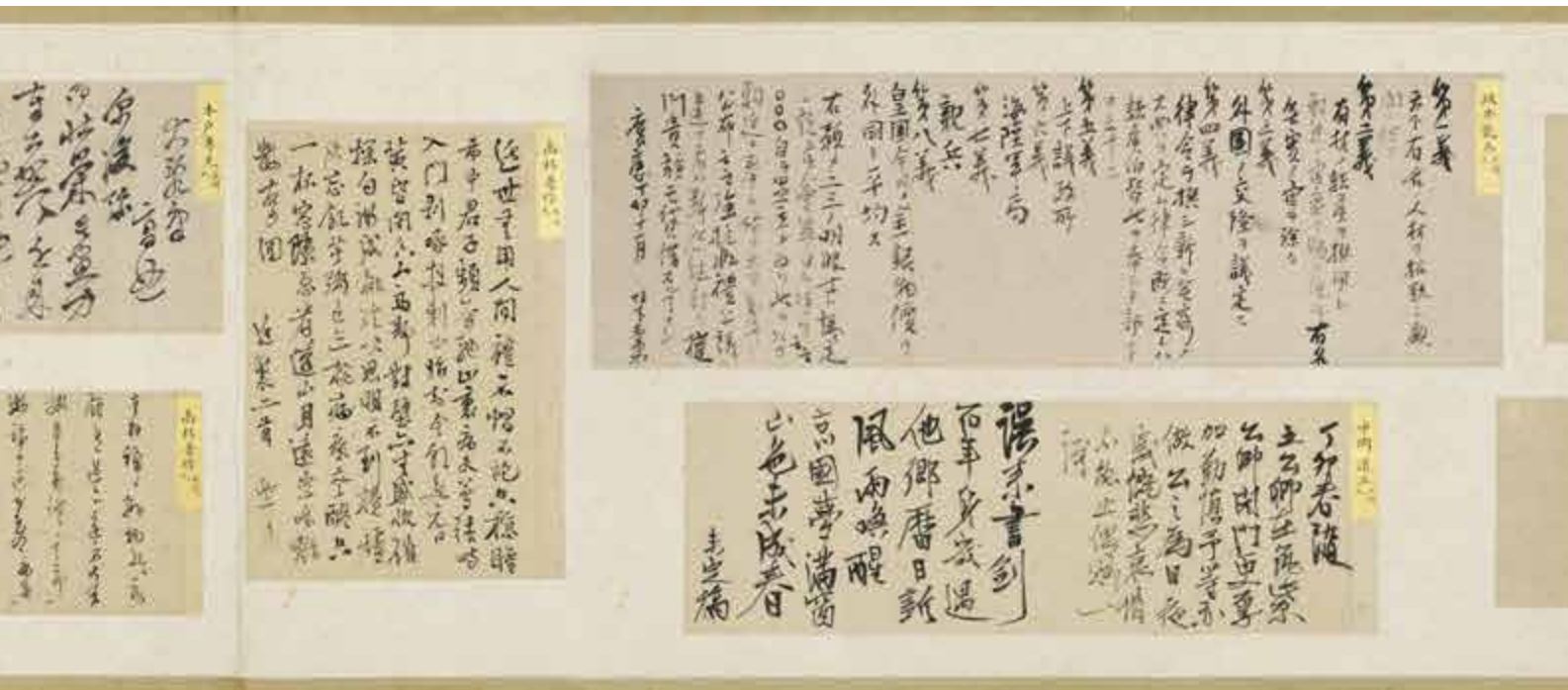
〔文化10（1813）年頃〕4月6日【WA47-13】*

絵師で鑑定家の菅原洞斎^{どうさい}に宛てた書簡です。虫の垂絹（平安時代から鎌倉時代にかけて、笠の周囲にたらしめた布）や蚊帳の図の模写を依頼し、『法然上人絵巻』に描かれた編笠のこと（手紙には絵も写されています）や、『福富草紙』の製作年代などを問い合わせています。京伝には好古癖があり、古器物などに関する考証随筆『骨董集』の材料収集をしていた時の書簡と思われます。京伝の好古癖は筋金入りで、曲亭馬琴宛ての書簡（後期展示）には、「好古癖があるので随筆執筆は楽しいが、手間ばかりかかる」と記しています。

さんとう きょうでん
山東 京伝
1761-1816

江戸時代後期の戯作者、読本作家。号は醒齋^{せいさい}など。様々な文学ジャンルで活躍したほか、考証随筆の著作もある。さらに、北尾政演^{まさのぶ}の名で浮世絵も描く才人であった。





亡友帖

【石田英吉関係文書1】

石田英吉が、武田耕雲斎、藤田東湖、木戸孝允、中岡慎太郎、高杉晋作、伊達千広などの亡き友をしのんで書簡や漢詩（草稿）などを一つの巻物に貼り込んだもの。坂本龍馬が「船中八策」をもとに書いた「新政府綱領八策」も含まれています。全長7.2メートルのすべてを広げて展示するのは今回が初めてです。

石田は土佐に生まれ、勤王運動に奔走した志士でした。維新以後には新政府に仕え、のちに貴族院議員となります。石田がこの巻物を作成した、あるいは資料をあつめた動機はつまびらかではないものの、高知県知事在任中の明治26（1893）年に、内務省からの訓令により維新の功労者の調査を行ったことも影響していると思われます。石田に限らず、ある程度社会が落ち着いてきた明治20年代以降になると、幕末維新期の活動について元幕臣や旧藩関係者によって古老の聞き書きや回顧がなされるようになってきていました。

さかもと りょうま 坂本 龍馬 1835-1867



幕末の志士。土佐生まれ。脱藩して放浪の後、勝海舟の門下で開国論に目覚める。亀山社中（のちの海援隊）を結成して貿易業に従事する一方、西郷隆盛と木戸孝允の間を取り持って薩長同盟を成立させ、幕府の大政奉還を実現させたが、京都近江屋で中岡慎太郎とともに暗殺された。

なかおか しんたろう 中岡 慎太郎 1838-1867



幕末の志士。土佐生まれ。坂本龍馬とともに薩長同盟締結に尽力した。龍馬の海援隊に続き陸援隊の隊長となったが、龍馬とともに近江屋で暗殺された。

きど たかよし 木戸 孝允 1833-1877

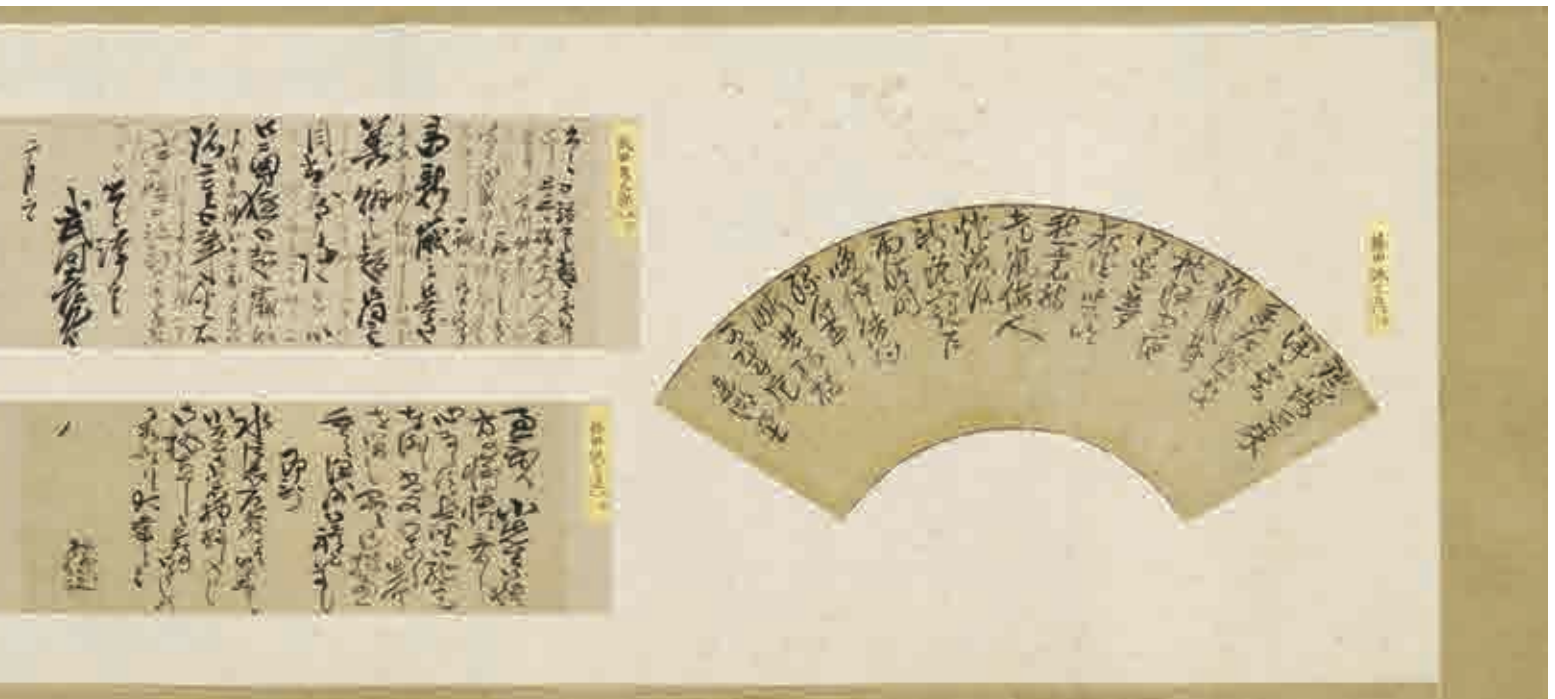


幕末・明治期の政治家。初め桂小五郎と称した。西郷隆盛と薩長同盟をむすび、倒幕をはかった。新政府では参与となり、版籍奉還や廃藩置県を推進した。

たかすぎ しんさく 高杉 晋作 1839-1867



幕末の志士。長州生まれ。松下村塾で学んだのち、尊王攘夷運動に参加。第二次幕長戦争で幕府軍を撃退するなど活躍したが、維新前に病没した。



勝海舟自画自賛

【勝海舟関係文書43】

勝が自画像に自ら賛（画に添えて書かれた詩や文）を書き添えた、自画自賛です。賛には、小事にこだわらないのは自分の気質であるから、将にもなれば卒（雑兵）にもなる、朝廷にあれば参議、在野にあれば散人となるが、いずれにしても、心持ちはさっぱりとして時世を見ている、といった内容が書かれています。野にあったときの心情を書いたものと考えられます。

かつ かいしゅう
勝海舟

1823-1899

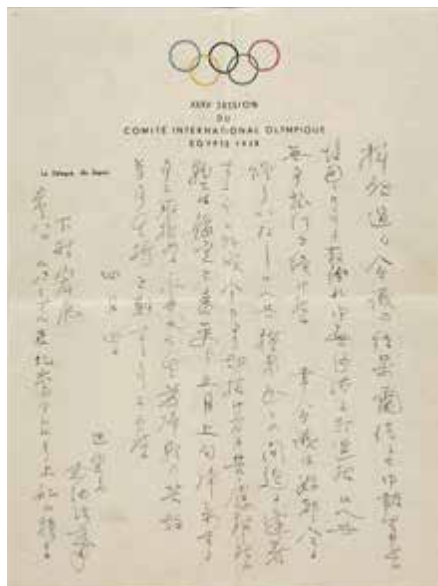
幕末・明治期の幕臣・政治家。明治維新後は安芳^{やすよし}と改称した。長崎の海軍伝習所で航海法を学び、咸臨丸の艦長として太平洋を横断して渡米した。帰国後は、幕府海軍育成に尽力。戊辰戦争では、幕府側代表として西郷隆盛と会見し、江戸城無血開城を実現させた。



嘉納治五郎書簡

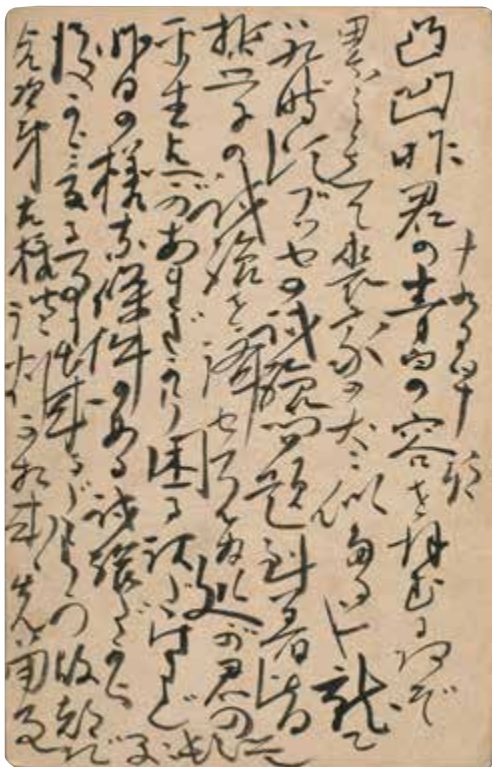
昭和13（1938）年4月4日
【下村宏関係文書（その1）256-1】

昭和11（1936）年7月、ベルリンでのIOC総会において、昭和15（1940）年の東京での夏季オリンピック開催が決定しましたが、その後の日中戦争の長期化により、開催は危うくなっていました。この書簡は、IOC委員としてオリンピック招致活動に尽力してきた嘉納が、昭和13（1938）年3月のIOCカイロ総会参加後、日本体育協会会長の下村宏に宛てたもので、依然山積する問題に苦慮している旨を伝えています。このひと月後、嘉納は帰路の船中で肺炎により亡くなり、同年7月には東京のオリンピック返上が決定しました。



かのう じごろう
嘉納 治五郎
1860-1938

明治から昭和期の教育家、柔道家。東京大学卒業後に講道館を開き、柔術を発展させて柔道を創始、研究と普及に尽力した。日本人初のIOC（国際オリンピック委員会）委員となるなど、広く日本のスポーツの発展に貢献した。



漱石書簡

【明治25（1892）年】
【本別3-85】

漱石から正岡子規へ宛てた葉書です。明治25（1892）年6月19日消印で、この頃2人は帝国大学に在学していました。漱石は、哲学の試験が済んだことに触れ、「君の平生点があればだから困る訳だけれど」、「後から受る事も出来るだらう」から教師に談判するように、と成績の悪かった子規に追試験を受けることを勧めています。しかし、子規は追試験を受けず、学年試験に落第して退学しました。

なつめ そうせき
夏目 漱石
1867-1916

小説家。本名金之助。明治22（1889）年頃より正岡子規と交際し、互いの創作を批評し合うなどして親交を深めた。英国留学から帰国後、東京帝国大学講師を経て朝日新聞社に入社。『行人』『こゝろ』（初出時は『心』）などの名作を次々と新聞に連載した。日本の近代文学を代表する作家。





かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎

1831-1889



日本画家。浮世絵師歌川国芳に入門、のち狩野派に学ぶ。安政年間末頃より浮世絵を描き、狂斎と号したが、風刺画のために投獄されたのを機に暁斎とあらためた。ユーモアあふれる筆使いと、卓越した描写力を持つ絵師で、国外でも高く評価されている。

暁斎絵日記

明治9 (1876) ~ 21 (1888) 年 【WA31-14】 **

暁斎は明治初年から亡くなる1ヶ月前まで、毎日絵日記をつけていました。内容は、日々の来客や絵の制作、出稽古の様子などで、軽妙な筆致は見ていて飽きません。展示箇所の右頁には、椅子に座って長い足を持って余すように伸ばしたイギリス人建築家のジョサイア・コンドルが描かれています。コンドルは、明治14 (1881) 年に暁斎に弟子入りし、暁英と号しました。
※前期は別の箇所を展示します。

肖像の出典

- 小野蘭山: 谷文晁 絵、小野蘭山 [賛] 『蘭山翁画像』 [文化6 (1809)] [写] <請求記号 WA21-29 >
- 山東京伝: 永井如雲 編 『国文学名家肖像集』 博美社 1939 <請求記号 910.28-N134k >
- 坂本龍馬、中岡慎太郎、木戸孝允、高杉晋作、勝海舟、嘉納治五郎、夏目漱石: 国立国会図書館電子展示会 「近代日本人の肖像」 <http://www.ndl.go.jp/portrait/>
- 河鍋暁斎: 吉岡班嶺 編 『真偽評価書画鑑定指針』 [14] 『浮世絵派諸系』 帝国絵画協会 昭和2-3 <請求記号 173-96 >

平成26年度 国立国会図書館企画展示



平成26年
10月18日(土) ~
11月18日(火)
(日・祝休館)

10:00~19:00
(土曜は18:00まで)

国立国会図書館
東京本館 新館展示室

入場無料

展示会構成とその他の主な「あの人」

- 為政者とその周辺…徳川慶喜、徳川斉昭、二宮尊徳
- 著作をめぐる(国学者、戯作者)…本居宣長、曲亭馬琴
- 科学の眼(本草学者、蘭学者)…シーボルト、杉田玄白、高野長英
- 幕末・維新の人々…西郷隆盛、吉田松陰、勝海舟、板垣退助、大久保利通、福沢諭吉
- 歴代首相…伊藤博文、吉田茂、鳩山一郎
- 議会政治家…尾崎行雄、浅沼稻次郎、市川房枝
- 日露戦争の軍人…秋山真之、乃木希典
- 明治の経済人…岩崎弥太郎、渋沢栄一
- 教育家…津田梅子、嘉納治五郎
- 学者…牧野富太郎、野口英世、和辻哲郎
- 文芸家…泉鏡花、正岡子規、芥川龍之介、
与謝野晶子、柳原白蓮、谷崎潤一郎、司馬遼太郎
- 芸術家…岡倉天心、横山大観、北大路魯山人
- その他(絵画、署名、家族への手紙、脚本)
…副島種臣、藤田嗣治、江戸川乱歩、三島由紀夫、陸奥宗光

「今月の一冊」(本誌2ページ)で紹介した南方熊楠の葉書も展示します。



Facebook ページ「国立国会図書館の展示(東京・関西)」で展示会情報を発信しています。企画展示「あの人の直筆」のみどころも多数紹介していますので、是非ご覧ください。
<https://www.facebook.com/NDLexhibition>





トルコ、オランダ、アメリカ、中国、マレーシア、カナダの様々な図書館を紹介してきた「世界図書館紀行」だが、今回は、イタリア北東部エミリア・ロマーニャ州の3つの公共図書館を紹介する。

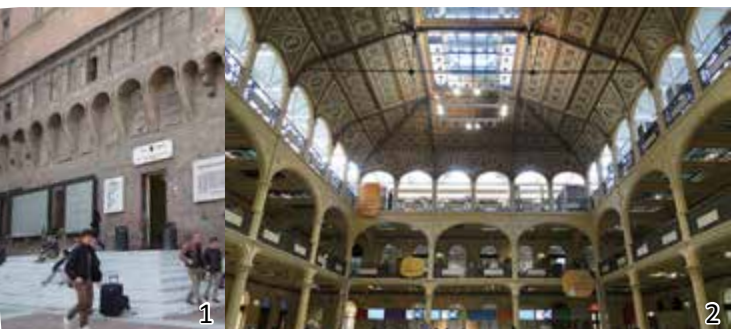
世界図書館紀行



イタリア エミリア・ロマーニャ州の図書館

渡邊 由利子





イタリア北東部の都市、ボローニャ。イタリア半島のつけ根に位置し、東はアドリア海、北はポー川に接する豊かな土地に恵まれたエミリア・ロマーニャ州の州都である。赤い街（La Rossa）とも呼ばれるボローニャの旧市街には、赤レンガの屋根を持つ建物が並び、中心地のマッジョーレ広場は、四季を通じて市民や観光客でにぎわう。

この広場の一角に、ボローニャ市立図書館はある。広場に面した小さなドア、それが図書館の入り口だ（写真1）。2001年の開館以来、年間100万人以上もの来館者を迎えるイタリアで最大規模の市立図書館だが、その入り口はこんなにも地味で小さい。広場を訪れる観光客の多くは、ここに図書館があることに気づかないだろう。

しかし、この小さな入り口を通り抜けると、驚くことに、中には劇場のような大きな空間が広がっている（写真2）。3階分の吹き抜けと、細かな意匠を凝らした天井。足元に目を向けると、ガラス床を通して、ローマ時代の遺跡が透けて見える。古い建造物の保存に力を入れるイタリアでは、図書館のために建物を新築するということがめったにない。これまでに、学校、蒸留所、織物工場、廃棄物処理施設、修道院など様々な建築物が図書館に造り替えられている。ボローニャ市立図書館も、実はサラ・ボルサ（sala borsa 証券取引場）の通称を持ち、その名の通り、証券取引所を改築してつくられた図書館だ。『国立国会図書館月報』の読者であれば、歴史を感じさせる建物で読書を楽しむのはさぞ良い気持ちだ

ろう…、と思うかもしれないが、実は、イタリアの図書館が抱える問題はここに集約されていると言っても過言ではない。歴史的建造物を利用した図書館は、本に関心のない人たちを惹きつけるにはあまりに間口が狭く、あまりに重厚で、あまりに閉鎖的であるのだ。実際、2013年の統計によると、公共図書館の登録者数の全人口に占める割合は、単純計算でたった12パーセント程度にしかならず、大部分のイタリア国民が図書館と無縁に過ごしていることが分かる*。

一方で、この状況に対する反省から、近年、市民を惹きつけるための積極的な取り組みを行う図書館が現われてきている。中でも、館内サインや家具、そしてHPのデザインの工夫は、日本の図書館を見慣れた目には、とても新鮮なものに映る。

2013年、筆者は在外研究の機会を与えられ、欧米の図書館を訪問した。イタリアを訪れた際、現地の図書館員に勧められて、エミリア・ロマーニャ州の3つの図書館を訪れた。モデナのデルフィーニ図書館、レッジョ・エミリアのパニッツィ図書館、そしてボローニャのサラ・ボルサ図書館である。今回の「世界図書館紀行」では、これらの図書館を、建物の歴史や構造、館内の装いなどに焦点を当てて紹介したい。なお、デルフィーニ図書館、パニッツィ図書館はアポイントを取らずに訪れたため、文中の職員の談話などは、後日メールで伺ったことをもとにしていることを記しておく。

*イタリアでは長い間全国的な図書館の利用統計は取られておらず、全体的な状況を把握することができなかった。2013年7月に、イタリア図書館協会（Associazione Biblioteche Italiane）と本と読書センター（Centro per il libro e la lettura）の主導により統計が取られ、全国的な状況がやっと明らかになった。なお、『日本の図書館 統計と名簿2013』の数値から単純計算すると、日本の全人口に対する公共図書館の登録者数は、43.1%である。



3



4



5



6



7



8

Biblioteca Delfini
 住所: Corso Canalgrande, 103 - 41121, Modena
 開館時間: 月14:00-20:00 火-土9:00-20:00
 URL: <http://www.comune.modena.it/biblioteche/delfini/>



9



10

a



11



b

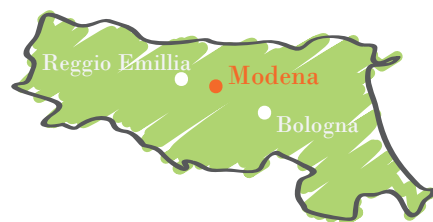


12



c

- a 図書館名の由来となった作家アントニオ・デルフィーニの紹介。
- b 本の販売も行っている。
- c 児童書のコーナー



モデナ

ボローニャから列車で北西に20分、バルサミコ酢で有名なモデナの街にデルフィーニ図書館はある。20世紀前半のモデナの作家アントニオ・デルフィーニ (Antonio Delfini) の名を冠した図書館だ。

モデナ駅で下車し旧市街に向かう。土曜日の昼すぎの街中には、人っ子一人見当たらない。今もイタリアでは、昼休みの伝統を守る店舗が多い。

道標を頼りに駅から15分ほど歩くと、デルフィーニ図書館ののぼりが掲げられた建物が現れた (写真3)。この建物には、図書館のほかに、市民ギャラリー、フィグリアーナ美術館、オラーツィオ・ヴェッキ音楽協会が同居している。

パラッツォ・サンタ・マルゲリータ (Palazzo Santa Margherita パラッツォは、貴族の邸宅や大きな建物を意味する) の名で呼ばれるこの複合文化施設の建物の歴史は、12世紀に建てられた聖マルゲリータ教会に端を発する。その後、フランチェスコ会の修道院、続いてナポリ騎兵の兵舎となったのち、1830年にモデナ公爵エステ家の従者の居住施設へと改築され、1874年には、貧しい子どもや孤児の保護団体 (Patronato pei Figli del Popolo) の施設となる。そして、1992年に、同じ通りの別の建物にあった図書館がこの1階に移転し、デルフィーニ図書館として開館した。2005年には全面リニューアルを行い、現在では2階部分も含めて図書館となっている。中庭が5つもある、街で最も大きな文化施設である。

さて、図書館に入ってみよう。サラ・ボルサのそれよりもさらに小さい建物の入り



Biblioteca Delfini, Modena

鮮やかな色彩が目を楽しませる、デルフィーニ図書館

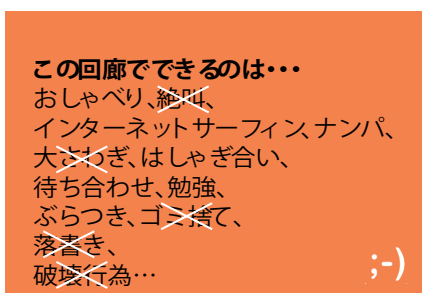
口を通ると、まずは中庭に面した回廊がある。柱と柱の間に、座って談笑している人の姿が見える (写真4)。回廊を進み、図書館に入ると、地味な外観からは想像もつかないような、鮮やかな色合いでかわいらしい字体の館内マップが目に入る (写真5)。これを見て分かる通り、建物は小さな部屋に分かれており、館内を見通すことはできない。図書館の入り口をくぐるとまず受付 (写真6)、その奥に、新刊書と日刊紙、週刊誌のコーナーがある。蛍光灯の光をとおす半透明の壁に、オレンジ色の書架が並ぶ (写真7、8)。古めかしい外観とは対照的だ。左手に進むと図書書架が並ぶ閲覧室がある。閲覧室の片隅には、DVDを閲覧することのできるコーナーが用意されている。ここでは、日本の図書館でよく見られるモニタが並んだDVD視聴コーナーと異なり、大勢で映像を楽しむことができる (写真9)。

明るい色で彩られた1階を後にして、部屋の片隅のらせん階段で2階へ上がると、雰囲気が一変し、茶を基調とした落ち着いた空間が姿を現す。天井を見上げると、美しい漆喰装飾が施されており、フロアが上下に分かれていることに気づく (写真10)。下層部には、雑誌、旅行ガイド、音楽コーナーがあり (写真11)、上層部には机と書架が交互に並べられ、勉強する人で席は埋まっていた。

館内のサインのデザインを手掛けたのは、モデナ在住のフィリッポ・バルテゾッティ (Filippo Partesotti) 氏。同図書館を含めこれまでに5つの図書館のサインを作成したデザイナーである。また、家具は、開館にあたりデザイン会社 Ditta Tecnocoop にオーダーメードで依頼したものだという。親しみやす

いサイン、利用者の様々な気分に対応するような家具によって、居心地の良い空間が作りだされている。

この文化施設の利用者への気配りがもっとも感じられるのは、入り口の回廊の壁の掲示である (写真12)。施設内での注意事項を示したものののだが、このように記されている。



リタ・ボルギ (Rita Borghi) 館長にとてもおもしろい掲示だと思うと伝えると、このような答えが返ってきた。「職員はみな、利用者に禁止事項ばかりを押し付けないように気をつけています。なかなか簡単にはいきませんが」。映画「ティファニーで朝食を」を始め、規則にうるさく、利用者を注意する図書館員像が流布しているが、そんな怖いイメージが少し和らぐように感じられた。



フィリッポ・バルテゾッティ氏がデルフィーニ図書館のためにデザインしたサイン (実際には使われていないものも含む)



Biblioteca Panizzi, Reggio Emilia 様々な利用者が共存する、パニッツィ図書館



レッジョ・エミリア

モデナからさらに10分ほど列車で北西に進むと、レッジョ・エミリアの駅に到着する。列車を降り、日が暮れ始めた街を歩く。駅前には、アジア系の移民が経営する商店や飲食店がまばらにあるだけのさみしい風情だが、街の中心地に近づくにつれ、休日の夕方を楽しむ市民の姿が増えてくる。途中で道に迷い、ブティックの店員に図書館の場所を訊くと、すぐに道を教えてくれた。案内通りに進み、大勢の人でにぎわう広場を過ぎたところに、パニッツィ図書館があった。図書館の名は、19世紀に大英博物館図書館長を務めたアントニオ・パニッツィ (Antonio Panizzi, 1797年レッジョ・エミリア県プレッシェロ生まれ) に由来する。

現在パニッツィ図書館のある建物は、1720年にイエズス会神学校パラッツォ・サン・ジョルジョ (Palazzo San Giorgio) として、建築家ボローニャ・ジュゼッペ・トッリ (Bologna Giuseppe Torri) の設計によって建てられた。18世紀末にこの地におきたレッジャーナ共和国の新政府により図書館の新設が提案され、1798年にこの建物に図書館が創設される。図書館の蔵書は、教会図書館から移管された資料と、エステ家の図書館の資料の複製をもとに構築された。その後、他の施設への移転を経て、19世紀半ば、市立図書館 (Biblioteca Municipale) として、パラッツォ・サン・ジョルジョに戻されるが、1910年、同じ建物の中に労働者階層のために「通俗図書館 (Biblioteca Popolare)」も創設された。一時は学生、女性、労働者、子どもたちでにぎわったものの、ファシズムの台頭により、

この図書館は休館となる。戦後再開されるが、同じ建物に、市立図書館と通俗図書館が同居することで生じる無駄を解消するため、1975年、二つの図書館を統合し、アントニオ・パニッツィの名前を冠した図書館が誕生する。

さまざま変遷を経た図書館だけあって、歴史を感じさせる重厚な建物である。しかし内部に一歩足を踏み入れると、明るく温かい空気が満ちていることに驚いた。館内の受付で、「写真を撮ってもいいでしょうか」と尋ねると、そばにいた警備員の男性が、「館内を案内しましょうか」と申し出てくださり、ありがたくお願いすることにした。

建物は、大きな中庭を取り囲んで地下1階、地上3階からなる。1階は、「現代セクション」、2、3階は「保存と郷土資料セクション」と分けられている。1階の受付の目の前には図書館の登録カウンターがある。さらに、一般書の書架が並び、レファレンスカウンターも備わっている。また、児童向けのコーナーも用意されている。2階には、郷土資料、定期刊行物の閲覧室があるほか、学生と思しき大勢の若者が静かに自習している部屋もあった。部屋に案内され、言われるままに天井を見上げると、鮮やかな色彩の絵が描かれていた(写真13)。2004年、アメリカの芸術家ソル・レヴィット (Sol Lewitt) を招き、直接天井に描いてもらった「旋回と回転 (Whirls and twirls)」という作品だそうだ。3階には、写本やインキュナブラが利用できる申請制の貴重書閲覧室がある。窓の外を見ると、中庭をぐるりと囲む図書館の構造がよく分かる(写真14)。最後に地下に降りると、パソコンが並ぶ部屋があった。パソコン教室などの講座



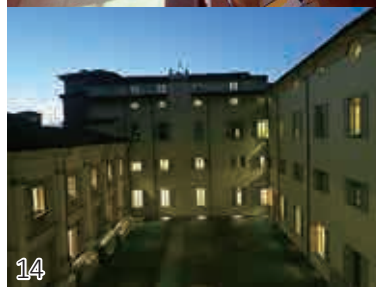
も開催されるそうだ (写真15)。

パニッツィ図書館は、歴史的な資料を持つ市立図書館と、市民の読書活動を支える通俗図書館の統合により生まれた図書館であるため、歴史的な資料の保存機能と市民の読書の場が一体となっている。現在も保存のための図書館と読書のための図書館が分かれて存在していることが多いイタリアにおいて、この図書館は、両者を統合していることに特徴がある。また、この地域ゆかりの写真家ルイーダ・ギッリ (Luigi Ghirri) の作品や、脚本家チェーザレ・ザヴァッティニ (Cesare Zavattini) の関係資料もコレクションに含まれている。多様な目的をもつ利用者が共存する図書館なのだ。

ジョルダナーノ・ガスパリーニ (Giordano Gasparini) 館長に、様々な利用者が気兼ねなく図書館を利用できるように、どのような工夫をしているかと尋ねたところ、このような答えが返ってきた。「貸出だけでなく、利用者とは直接つながるようなたくさんのサービスを提供するようにしています。特にレファレンスや読書案内、子どものための教育プロジェクト、貴重資料の展示、講演会などです。館内のサインにも注意を払っていますし、様々なプロジェクトへ利用者が参加するよう促しています」。館内には、驚くくらい大きなサインが掲示されており、活気あふれる親しみやすい雰囲気を作り出している (写真16, 17)。サインや図書館のウェブサイトはすべて同地生まれのアーティストのピエトロ・ムッシーニ (Pietro Mussini) の協力で作成されているそうだ。



13



14



15



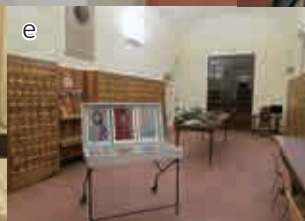
16



17



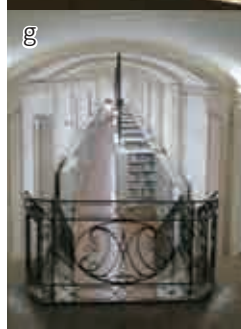
d



e



f



g



h

- d 展示会スペース
- e 保存と郷土資料セクション
- f 児童書コーナー
- g 2階から1階の書架を見下ろす。
- h 郷土資料の開架書架

Biblioteca Panizzi
住所: Via Farini, 3 - 42121, Reggio Emilia
開館時間: 月、土 9:00-12:45 火-金 9:00-12:45, 16:00-19:00
URL: <http://panizzi.comune.re.it/>



18



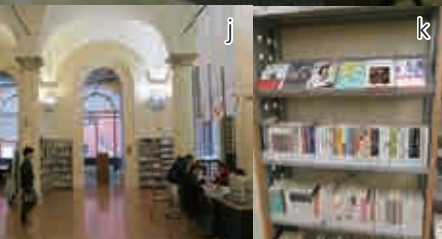
i



19



20



j



k

Biblioteca Salaborsa
住所: Piazza del Nettuno, 3, Bologna
開館時間: 火-金 10:00-20:00 土 10:00-20:00
URL: <http://www.bibliotecasalaborsa.it/>



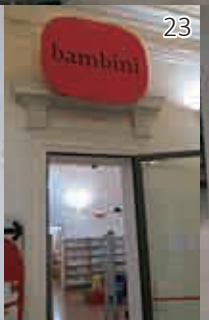
21



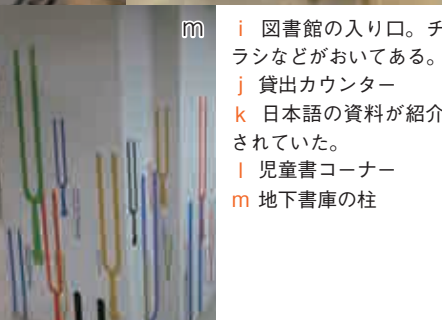
l



22

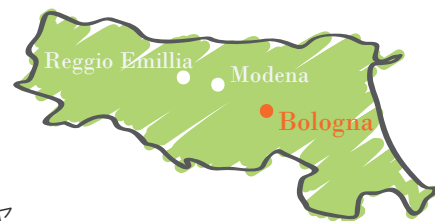


23



m

- i 図書館の入り口。チラシなどがおいてある。
- j 貸出カウンター
- k 日本語の資料が紹介されていた。
- l 児童書コーナー
- m 地下書庫の柱



ボローニャ

最後に、冒頭で触れたサラ・ボルサ図書館とボローニャの街について改めて紹介したい。現在図書館がある場所は、ローマ時代には、市民の集会所や裁判所となっていた。当時の建物の跡が、現在の図書館のガラス床から透けて見える。ローマ時代を通じて、さまざまな形で使われていたが、その後、この地域の建物は荒廃してしまう。13世紀になって、改めて建設が始まり、その一部はボローニャの領主であったヴィスコンティ家の元で軍隊の駐屯所となる。その後も、この地帯の建物の領主はたびたび変わるが、1568年には、なんと植物園が造られる。植物学者ウリッセ・アルドロヴァンディ (Ulisse Aldrovandi) が造った、世界で2番目に古い植物園だ。その後、植物園は移設され、軍隊や消防士の訓練場となった。19世紀になると、ここを街の経済の中心としようという動きから、大規模な建築工事により、鉄とガラスのパヴィリオンの証券取引所が誕生する。それが、現在のサラ・ボルサの入り口の大空間である。

この大空間は細い鉄の柱と、その上のアーチによって支えられている。この時代、建築に鉄を使用することが流行したが、サラ・ボルサのデザインもそれに倣ったものである。最先端のデザインにより造られた証券取引所だが、不況により商業取引が減ったことで1903年には閉鎖されてしまった。

その後、レストラン、銀行、旅行会社、さらにはスポーツセンターがこの建物に入り、一時はバスケットボールや、ボクシングの試合も行われたようだ。また半地下の部屋は、人形劇の劇場ともなった。このように用途は様々に変転するが、1970年代になり、スパー



Biblioteca Salaborsa, Bologna

サラ・ボルサ図書館 おおわれた広場



biblioteca.salaborsa

salaborsa

ス不足が問題となっていた中央図書館の移転先候補となった。計画の進捗はずいぶん遅れたようだが、ボローニャが欧州文化都市に選ばれることが決まり、中央図書館の移転計画を含むBologna2000というプロジェクトが立ち上げられたことで、移転作業が進んだ。遺跡発掘と改築を経て、2001年、サラ・ボルサ図書館開館となる。

入り口の大空間 (写真18) は、「おおわれた広場 (Piazza coperta)」という名称をもち、ショップ、インフォメーションカウンター (写真19)、喫茶店 (写真20) が備わっている。図書は、大空間の先にある閲覧室と、地下の開架の書庫に並んでいる。吹き抜けを囲む2階は、新聞の閲覧スペース (写真21) とマルチメディア・ルーム、3階にはアーバン・センター・ボローニャ (Urban center bologna) という名の都市計画に関する講座や研修が開催される部屋が用意されている。

サラ・ボルサでもこれまでに見てきた図書館と同じように、シンプルでくっきりとした字体のサインが、目に留まる (写真22, 23)。図書館のウェブサイトでも同じ字体が使用されている。これは、地元のグラフィックスタジオ Chialab がサラ・ボルサのためにデザインした biblio というフォントだ。ロゴマークは銀杏の形をもとにデザインされている (右上参照)。

ボローニャでは、戦後の都市開発の激化から古い街並みを守るため、1960年代に、歴史的な中心街の建物を保存する計画が生まれた。その動きは、他の都市の手本ともなっている。また、欧州文化都市選定をきっかけとし、不要施設を文化施設として再利用しようという動きがより盛んになり、パン工場が

ボローニャ近代美術館 (MAMBO= Museo d'Arte Moderna di Bologna) に、畜殺場がボローニャ大学の音楽・演劇学部の校舎に、タバコ工場と畜殺場の一部がフィルムアーカイブに、塩の貯蔵所がセクシャルマイノリティーの問題を扱うLGBTセンターとして生まれ変わっている。

おわりに

今回紹介した図書館は、現地の図書館員から勧められて訪れたものであり、イタリアでも例外的に注目されている図書館である。イタリアでは、図書館と言えば、まず第一に保存機能としての機能に重点を置いてきた。近年になってやっと読書推進に力を入れるようになってきたところであり、利用者サービスという観点から言えば、必ずしも先進的ではない。だが、図書館という空間の作り方を見たときに、今回見てきたようなおもしろい試みが多数見つかる。近年、日本でも建物のリノベーションが注目されるようになってきているが、一時的な流行では終わらず、今後いっそう既存の建築物を有効活用していくことが求められるようになるであろう。エミリア・ロマーニャ州の図書館が、これからの公共空間のあり方のさまざまな可能性を見せてくれたように思った。

(わたなべ ゆりこ)

利用者サービス部サービス企画課)



お知らせ

■ 登録利用者情報の 失効と更新

国立国会図書館に個人で登録されている方の利用者情報は、登録日又は変更日から3年後に失効します。失効日の約3か月前から失効日までの間に、当館ホームページのNDL-OPAC (<https://ndlopac.ndl.go.jp/>) にログインすると、画面上に更新の案内が表示されますので、ご自身で失効日の更新（3年間延長）をお願いします。詳細は、以下をご参照ください。

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/information/guide.html#lapse>

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > サービス概要
> 登録利用者制度のご案内 > 登録の失効と更新

- 登録の更新ができるのは、失効日の約3か月前から失効日までの間のみです。失効日を過ぎると、再度、新規登録をする必要がありますのでご注意ください。
- 失効日が不明の場合は、NDL-OPAC にログインして「申込状況・利用者情報」画面からご確認いただけます。
- メールアドレスを登録している方には、失効日の約3か月前、約1か月前および約1週間前にメールでお知らせします。

なお、平成23年12月以前に利用者登録をされた方で、登録利用者カードの切替え等をされていない方の失効日は、平成26年12月31日です。平成26年10月から、NDL-OPACで更新いただけます。

○問合せ先

国立国会図書館 関西館 文献提供課 複写貸出係

電話 (0774) 98-1313 (休館日を除く月～土 10:00～18:00)

お知らせ

■ 国際シンポジウム

「日仏交流の過去と現在— 国立国会図書館・フランス 国立図書館の所蔵資料から」



ヴェロニク・ベランジェ氏

2014年は、日仏会館創立にはじまる日仏文化協力90周年にあたります。

国立国会図書館では、フランス国立図書館との協力協定に基づき、日仏両国の交流史をテーマとした電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」を12月に公開します。

これを記念して、フランス国立図書館からヴェロニク・ベランジェ氏をお招きし、国際シンポジウムを開催します。ベランジェ氏は、『酒飯論絵巻』の研究等で知られる日本資料の専門家です。また、ベランジェ氏、クリストフ・マルケ氏（フランス国立東洋言語文化研究学院教授）、西堀昭氏（横浜国立大学名誉教授）らをパネリストに迎え、三浦信孝氏（中央大学教授）の進行によるパネルディスカッションを行います。

○日 時 12月11日（木）15:00～18:00（14:30開場）

○会 場 国立国会図書館東京本館 新館講堂

○後 援 在日フランス大使館

○協 力 日仏会館、日仏会館フランス事務所

○プログラム ※同時通訳付（仏⇄日）

【報告1】日本におけるフランスのイメージの形成—電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」の紹介

渡邊 幸秀（国立国会図書館利用者サービス部司書監）

【報告2】フランスにおける日本文化受容の側面—フランス国立図書館の電子展示会プロジェクト

ヴェロニク・ベランジェ氏（フランス国立図書館日本資料担当司書）

【ショートスピーチ】日本の近代化とフランスの影響

三浦 信孝氏（中央大学教授）

【パネルディスカッション】日仏交流の諸相—近代的制度、産業技術と芸術文化を中心に

○申込方法 12月9日（火）17:00までに、国立国会図書館ホームページの参加申込みフォームからお申し込みください。定員に達した時点で受付を終了いたします。

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/event/20141211lecture.html>

（国立国会図書館ホームページ>イベント・展示会情報）

○問合せ先 国立国会図書館 利用者サービス部 サービス企画課 展示企画係

電話：03（3506）5260（直通） FAX：03（3580）3559

メールアドレス：tenji-kikaku@ndl.go.jp

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第261号 A4 134頁

季刊 1,800円(税別) 発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-767-2)

<主要立法(翻訳・解説)>

イギリスの2013年名誉毀損法

フランスの県議会議員選挙制度改正—パリテ2人組投票による男女共同参画の促進—

ドイツにおける行政の電子化推進のための立法

韓国の特別検察官法及び特別監察官法

台湾のたばこ煙害防止法と公共の場所の喫煙規制

<主要立法(解説)>

アメリカにおける最低賃金引上げをめぐる動向

ロシアにおけるテロ対策強化の動向



レファレンス 764号 A4 102頁 月刊 1,000円(税別) 発売 日本図書館協会

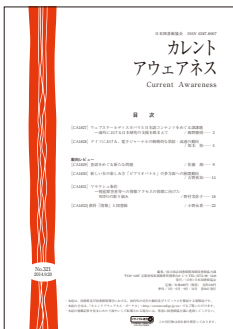
ドイツ公務員制度の諸問題

我々は研究不正を適切に扱っているのだろうか(上)—研究不正規律の反省的検証—

英国の地方分権改革—権限委譲の到達点と新動向—

異次元金融緩和の出口戦略—日銀と政府の財政コスト分担の観点から—

南海トラフ地震対策の現状と課題—高知県及び黒潮町の取組を事例に—(現地調査報告)



カレントアウェアネス 321号 A4 28頁 季刊 400円(税別) 発売 日本図書館協会

ウェブスケールディスカバリと日本語コンテンツをめぐる諸課題—海外における
日本研究の支援を踏まえて

ドイツにおける、電子ジャーナルの戦略的な供給・流通の動向

<動向レビュー>

査読をめぐる新たな問題

新しい本の楽しみ方「ビブリアバトル」の多方面への展開動向

マラケシュ条約—視覚障害者等への情報アクセスの保障に向けたWIPOの取り組み

教科「情報」と図書館

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Minakata Kumagusu's letters to Shirai Mitsutaro
- 04 Materials newly available in the Modern Japanese Political History Materials Room
- 13 The NDL collection is coming to your town : Present state of Digitized Contents Transmission Service for Libraries
- 19 Exhibition "Autograph manuscripts and original artwork of well-known people"
- 26 Travel writing on world libraries : Italy, Emilia-Romagna
- 12 <Tidbits of information on NDL>
The path toward the article "Materials newly available in the Modern Japanese Political History Materials Room" was published
- 18 <Books not commercially available>
Takashimaya bijutsu hyakunenshi = The 100 year history of Takashimaya Fine Arts Division : 1909-2010
- 34 <Announcements>
○Expiration and renewal of user registration
○International Symposium : Past and Present of Japanese-French Exchanges—from the Collection of the National Diet Library and Bibliothèque nationale de France
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成26年10月号 (No.643)

平成26年10月20日発行 定価540円
(本体500円)

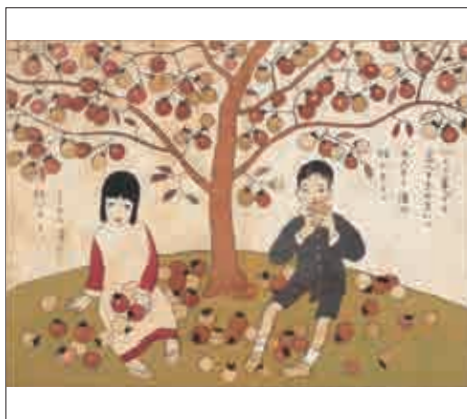
発行所 国立国会図書館

編集責任者 小寺正一

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(販売)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



『夢二絵手本 1巻』

竹久夢二 著 岡村書店 大正12 1冊 23cm

「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168645/4>

国立国会図書館月報

平成26年10月20日発行 (毎月1回20日発行)
(10月号通巻643号)

発売：公益社団法人 日本図書館協会 定価540円(本体500円)